

第1章

文化創造都市
ビジョンに寄せて



取りまとめを受けて

昨年4月に森市長に提出した「文化創造の理念」並びに「6つの指針」(以下「理念・指針」)を踏まえ、富山市では、この度、「理念・指針」をより具体化した「文化創造都市のイニシアチブ」(以下「イニシアチブ」)を取りまとめられました。これにより、(理念、指針、イニシアチブ)の3点セットから成る「文化創造都市ビジョン」(以下「ビジョン」)が整った訳であり、時宜に叶ったことと祝意を表します。

「理念・指針」を市民生活に「役立つ」ものとするためには、すなわち、「理念・指針」に「命」を吹き込むためには、より抽象性、哲学性の高

い「理念・指針」から、より具体性、実践性、有用性、即時性、更には、市民性に富んだ「青写真」創りに移行することが不可欠です。それが、「イニシアチブ」の策定でした。

この度策定された「イニシアチブ」の内容が、多くの市民をして「やはり」と思わせ、身近に感じ、そのうちのひとつでも、ふたつでも企画してみたいとの気持ちにさせる、そんなものとなったのではないかと思います。昨年、「理念・指針」創りのお手伝いをした委員のひとりとして、今後「ビジョン」の実現に際し、特に留意されることが望まれる諸点を中心に、以下、

私見をご披露します。

1 「理念・指針」策定に際し—前提とした諸点

本論に入る前に、昨年の「理念・指針」策定作業の参画に際し、私が前提とした点について簡単にレビューしておきます。

大学の講義調になってしまいましたが、先ず第1に、「文化」には、「狭義の文化」と「広義の文化」があることを意識しました。前者は、学問、芸術、芸能、ファッション、スポーツなどを指し、行政で言うところの主として文化教育担当部局が扱います。文化勲章の対象も、こちらです。これに対し、後者は、日常生活(衣食住)をはじめ、社会の営み万般の「ありよう」を広く指します。たとえば、ものづくり、漁業、まちづくりなどの「ありよう」、若者や女性の社会参加の「ありよう」、お年寄りへの地域の寄り添い方など、全て文化が反映します。つまり、「広義の

文化」は、行政で言えば、産業、農業、都市、健康、医療、衛生、福祉などを手掛ける、殆んどすべての部局がカバーしています。「文化創造都市」と言えば、誰しもが思い浮かべるのは、「狭義の文化」でしょう。でも、「理念・指針」が特に力を込めたのは、実は後者でした。この「広義の文化」こそが、すべての市民の生活と直接関わり合いを持ち、地域の「文化度」の目安となるものです。

第2に、文化には、「形のある(英語で言えば tangible)文化」と「形のなき(intangible)文化」がある点も、大切です。会社で言えば、出来た製品や、販売のネットワークなどは前者、これに対し、会社内の先輩と後輩の人間関係、上司と部下の人間関係などは後者です。この人間関係が特に強く表れるのは、ことばづかいです。普通、後輩が先輩を、或いは、部下が上司を、「XX君」と呼ぶことはありません。これらは、単に言葉の問題ではなく、心性、メンタリ

ティーの問題です(因みに、英語の世界では、こうした明確な区別はありませんね)。或いは、多くの日本人は自然を尊び、畏怖します(いわゆるアニミズム)。供養などの実践の根っ子にあるこのメンタリティーは、日本人が農業を始める以前から、つまり、縄文の時代から、スパゲティーやワイン、スマホに染まるようになった今日まで、大きくは変わっていません。「形のある文化」は、まま大きく変容しますが、「形のない文化」の中には、自然観、宇宙観のよ

うに、何世紀にもわたり変わらないものがあります。だから、ハイテク漬けになった現代日本人ですが、アニミズムの宝庫と言われる万葉集や芭蕉の句がスーッと胸に響く。この点も、「理念・指針」創りに際し留意しました。

第3に、文明と文化との違いについて一言します。硬い言い方で気が引けますが、前者は「普遍性」、「共通性」に着目した概念です。例えば、大学制度。この制度そのものは国際的にほ

ぼ共通です。つまり、大学制度は「文明の利器」なのです。これに対し、日本であれ、米国であれ、個々の大学にはそれぞれ独自のカラーがある。この多様なカラーこそが、大学ごとに根付いている独自の文化です。つまり、文化は、「個別性」、「地域性」などの「違い」に着目した概念です。文化は、あらゆるレベルで存在します。個人レベル(特技、嗜好…)、家庭のレベル(お母さんの味噌汁の味…)はもとより、団体レベル(学校、会社…)、地域レベル(村、町、市…)、部族レベル、民族レベル、国レベルに至るまで、あらゆるレベルで、他者にはない独自性をもたらすもの、それが文化です。蛇足ながら、文明は未開社会には存在しませんが、文化は未開社会にも「堂々と」存在します。それどころか、チンパンジーの集団にも、ライオンの群れにも、独自の文化があります。ライオンで言えば、狩の手法や、コミュニケーションの方式は、群れにより様々です。それが文化なの

です。

大学の講義調になって恐縮です。他にも、国際比較の視点を含め、何点か留意点がありますが、「理念・指針」の冊子の方に書きましたので、(ご関心を持って頂ける方は)そちらをご覧ください。私としては、以上の諸点にこだわりながら「理念・指針」創りをしたことを、お伝えしたかったと言うことです。

(一) 市民性

昨年まとめた「理念・指針」ですが、よく見えなかったものがあります。それは、「市民の顔」です。多分、専門家の方々から見ると、良い内容の冊子だったと思われませんが、これを富山市民がどう受け取られるか、何処まで関心を持って頂けるか、全部読む方が多数いるか(「層かご」にばいっと棄てる方がいるのではないか)など、正直言ってみえないところがあり、心配でした。

2 「ビジョン」実現に向けてー留意すべき事項

冒頭にも触れましたが、「ビジョン」創りでのキーワードは、市民性、有用性、実践性、具体性でした。そこで、以下では、「ビジョン」実現に際し特に留意して頂きたい点に言及します。

今後の「ビジョン」実現に際しては、出来るだけ多くの市民を巻き込み、つまり、参加を得て、否、富山市民の発案による、市民の「顔」が見える企画が、先ずもって望まれます。月並みな言い方ですが、「ビジョン」の実現に際しての「主人公」は市民です。英語ではownershipといいますが、市民にその気になって貰えないような「青写真」だったら、創らなかつた方が

良かった。普段発言しないような人の声、草の根の声、声なき声を、是非とも発掘して頂きたい。そう出来るかどうかは、富山市の関係者の熱意、フットワーク、手腕にかかっています。奮起を期待します。

まとめます。今どきの言い方になります。が、「市民の目線」に立った企画、「市民の顔」の見える企画を、心がけて頂きたいということです。

(2) 実践性、具体性、有用性、即時性

ある時、懇話会の大西委員から、こんな発言がありました。「ペーパー作りなど、いい加減にやめて、街に出て、一つでも一つでも、企画を実現しようや。今直ぐにでも。」

二理も三理もある発言です。そう、「ビジョン」、なにかなく、「イニシアチブ」に盛られた内容が、いつでも始められるような平易なも

のから着手されることを期待します。29年度には、欲張らず、静、健、結、感、創、夢の各指針につき「ひとつ」か「ふたつ」で良いので、企画を確実に実現すると言う考え方で良いでしょう。勿論、市民参加型の企画で。

なお、役所の仕事は、「万遍なく」、「切り込まれないように」という配慮が強く働いたため、防衛的になりがちです。でも今回の「ビジョン」の実現にあたっては、そうあって欲しくない。「体系的」、「網羅的」でなくて良い、「つまみ食い」で構いませんから、「明日にでも始められる企画」、「実践性」のある「パンチのきいた企画」から着手して頂きたい。繰り返しになりますが、最初の年は、欲張らず、企画を6〜12件に絞りこんだ、シンプルな姿勢でのぞんでは如何でしょうか。単純なほど、「パワー」は強まります。

(3) ネットワーク性

今回、各先生が提出された「イメージ」を拝読しましたが、「人と人の繋がり」の強化に触れられたご意見が多いことに、「我が意を得た」気分になりました。

ところで、イタリヤやスペインなどのラテン系社会はもとより、中国や韓国でも、家族の交わりは(日本と比べ)ずっと濃いと言うのが、私の実感です。此処で言う家族とは、核家族ではなく、近い親族を含む大家族のことです。つまり、これらの社会では、縦、横双方向のコミュニケーションが担保されるメカニズムがあります。日本でも、昭和30年代あたりまでは、トラさんの映画にあるように、幾つもの核家族が一緒に集まって、祝ったり、法事したり、談笑したりしましたが、今日では、そういう機会は少なくなっています。その分、縦、横のコミュニケーションは不足がちで、「孤独な老

人」が増えていきます。(最近の傾向として、不幸があった場合、近親者による密葬が多くなっています。同根の話でしょう)

いや、親戚関係だけではありません。日本では一般的に、西欧と比べ、年齢を超えた世代間のコミュニケーション、すなわち、「縦のコミュニケーション」が不足がちです。加えて、日本の社会は、元々縦割りが強いので、「横のコミュニケーション」も不足がちです。「横のコミュニケーション」も「縦のコミュニケーション」も足りないと言うことであれば、縦断的、横断的ネットワークの構築が急務と言えます。

それでも、富山市は東京などよりずっと健全な状況にあるものと確信します。もともと、日本全体の趨勢に引きずられる恐れはあるでしょうけれど。そこで、敢えて言いたい。「ビジョン」実現に際しては、社会に「横串」、「縦串」を通し、もって、「縦の交流」、「横の交流」を

喚起するような企画が欲しいと。(それを、「歩け歩け」運動を通じて実現するか、「音楽サークル」、「文学サークル」、「俳句サークル」など…を通じて実現するか、具体論は、市民の方々にお任せするほかありません。)

(4) 行政に望むこと―全市役所体制で

最後に、富山市役所に期待する点を申し述べます。既述のように、「理念・指針」では、「狭義の文化」だけでなく、「広義の文化」を広く扱いました。つまり、市民生活、社会の在り方全般をカバーしました。これに呼応して、今回まとめられた「ビジョン」も、広い分野をカバーしています。従って、「ビジョン」実現に際しては、全部局の関与が不可欠です。「ビジョン」の実現は、「全市役所体制」で、腰を据えて臨んで頂くことが肝要です。そのためには、森市長から全部局に強い指示をお出し頂きたい。先に

「横串を通す」と言う話をしましたが、それが必要なのは、市民だけではありません。富山市の行政にも必要です。



理解は文化から始まる

古川 一郎

「文化創造都市ビジョンを考える」

富山市は、次になにをするのか。私たちの生活を取り巻く大きな環境変化の中で、地域中核都市の雄、富山市の動向に注目が集まっている。しかし、不確定で将来が見通せない時代の中で、未来の道を拓いていく次の一手を打つためにまずやらなければならないことがある。それが良き文化創造都市の実現である。

ここでまず認識しなくてはならないことは、文化＝芸術ではないということである。地域が子供を育てるといった言葉を聞くが、これは親ばかりでなく地域文化が子供の成長にとって大変重要であるということである。地

域文化の中で育った人々が、未来の地域を支える。このように、生活の中の様々な制度や言語、人々の間で共有されている主観的な価値観、信念、態度、規範、ルールは文化に埋め込まれている。しかし、文化は生活の隅々に空気のように当たり前に存在するので、特段問題が起きなければ意識することはない。

意識しなくても、富山には富山の文化がある。富山市は昔から、北前船や「富山の葉売り」に代表されるように人々は進取の気質に富み、富山湾、神通川が形成した扇状地、豊富な

水資源、地政学的な立地条件など、山、里、海の幸に恵まれ、交通の要衝でもあった。このような環境の中で育った人々は、金沢のような煌びやかな文化は無いが、実質的な文化を尊び奥ゆかしく生活を送っていた。第2次世界大戦で町が焼け野原になったのも、産業が栄えていたからである。今でも、北陸地方の経済の中心地としてのプレゼンスを維持し、人々は豊かな生活を楽しんでいる。しかし、このことが新たな一步を踏み出すことをためらわせているのではないか。逆説的だが、豊かさゆえに富山市は変化を望んでいないように見える。だから、次の一手を打つためには、変化する心の準備が必要なのである。文化創造都市宣言をする大きな理由はここにある。

変化をポジティブにとらえる心の準備

人は一人では生きられない。だから、社会を

形成する。それぞれの社会には固有の社会構造があり、文化はその社会構造から生まれる。社会構造の最も基本的な構造は、人と人との結びつき方である。それぞれの社会では、この結びつき方が異っているので、それぞれの社会に固有の文化が形成されることになるのである。たとえば、個人主義的な人々のつながり方が強ければ、生まれてくる文化は個人主義的な文化になる。集団主義的な人々のつながり方が強ければ、集団主義的な文化が生まれてくる。日本には日本文化があり、アメリカにはアメリカ文化がある。

どのような行為が望ましいか、望ましくないか、何が美しく、美しくないのかといった、物事の良否を判断する基準は文化が生成される中で決まってくる。このような社会、地域の文化の中で私たちは生活している。注意したいのは、私たち一人ひとりが文化を創造



古川 一郎

ふるかわいちろう

一橋大学大学院商学研究科教授

1979年東京大学経済学部を卒業し、東京銀行に入行。1988年東京大学大学院経済学研究科を卒業し、東北大学助教、大阪大学助教を経て、1995年より一橋大学商学部助教授。1998年から1999年にかけてカリフォルニア大学ハーススクール客員研究員、2000年より現職。

する役割を担っていると同時に、文化が私たちの認識や行為を制約しているという点である。

話は少しそれるが、大手電機メーカーの不適切な会計処理や自動車メーカーの排ガス不正などの企業不祥事が最近話題になっている。これらの不祥事はごく限られた一部のトップの仕業だったのであろうか。おそらく、そんなことはないはずである。特に、生え抜きの人事が行われるような組織では、現場の多くの社員はトップの不誠実な行いに気付いていたはずである。しかし、社内の場の「空気」に押されて、おかしいとわかっていても黙っていたのである。何が良いか悪いか、するべきこと、してはいけないことの判断基準が文化には埋め込まれている。言葉づかいや礼儀作法、上下関係等もそうだ。私たちは集団生活の至るところで、このような制約を文化から受けているのである。両社とも世界でも有数の大

企業であるが、成功の罫にはまり油断して企業文化が劣化していたのだろうか。これらは、企業文化の悪い例であるが、だからこそ、常に優れた企業であろうと思う企業経営者は、優れた企業文化・社風を創造・維持することに熱心なのである。

しかし、だからといってトップが都合よく文化を変えられるわけではない。地域・集団の人間関係の特質に合わない文化をつくるのは不可能である。日本人はアメリカ人にはなれない。東京には東京の文化があり、富山には富山の文化がある。どちらが優れているとか劣っているというものではなく、それぞれがその地域の個性なのだ。一人ひとりの個性を変えられないように、一旦形成されると地域文化もしぶとく継承されるので、そう簡単に変わるものでも、誰か一人の力で変えられるものでもない。

すなわち、文化は人々の認識や行為に大い

に影響するが、同時に文化自身も人々の日々の行為を通じてしっかりと継承されているのである。だから、普段意識することがなくても、実は文化は地域の将来に深く関与している。したがって、たとえ困難でも、文化について深く理解し、意識的に良い方向に向けて行かなくてはならない。もし、どうしても生活環境の変化が避けられないとしたら、主体的に変化に向き合う文化が重要である。

技術革新が生活環境を変える

時として文化が時代に合わなくなったと強く意識することがある。たとえば、明治維新や敗戦といった、社会存続の危機意識が人々の間で共有されるような時期である。そんな劇的な事件でもない限りはつきりと変化を意識することは少ないが、時間を長くとれば、身近な事例はいくらでもある。昔に比べて最近で



富山市山田若土

は結婚式で仲人さんをたてなくなったことなども、そうした例の一つであろう。慣習的、伝統的で変化しないと思われる冠婚葬祭であつても、少しずつ変化している。文化は意識しなくても、時代とともに、人々の日々の実践を通して変化しているのである。

しかし、ここに来て私たちの日常生活に大きな変化を求める状況が、はっきりと姿を現し始めている。少子高齢化ではない。情報革命を根っこにもつ、大きな社会変動がそれである。人工知能、それを支えるビッグデータ、インターネット、IoTはとどまるところを知らない。さらに、グローバル化や新興国の急速な発展と相まって、もはや大都会だろうが過疎地だろうがどこであろうが、技術革新を背景にした社会変動の影響を受けざるを得ない状況になってきた。

特に人工知能は、ここ数年急速な進化を遂げていくだろう。それ以上に重要なのは、仕事のやり方や企業間、組織間の関係性なども、急速に変わっていくのは避けられそうもないという点である。変化の少ない想定内の安定した職場のイメージなどは、もうすぐ幻想になってしまうだろう。

すでに起こってしまった変化もある。新幹線により富山市は、東京や世界とぐっと近くなった。このことも、生活環境の変化を強く促す要因である。もちろん、変化はもろ刃の剣のようなもので、良いことばかりでも悪いことばかりでもない。しかし、このような変化から目を背けていられないのは、人、モノ、金、情報といった経営資源、すなわち経済的な価値を生み出す根源的な資源が、効率的に価値を生み出す地域に移ってしまってからである。すなわち、今後は、地域間競争は避けて通れない。負けたら、良質な資源からどんどん失うだろう。富山市も例外ではない。それぞれの

げている。コンピュータが自ら学ぶ方法を、人間がコンピュータに教えることに成功したからである。ディープラーニングがそれである。日々蓄積されている膨大なデータから、人間に頼ることも休むこともなく学習し続けるようになってきている。チェスや将棋ばかりでなく、あと10年は先といわれた囲碁でもプロに勝てるレベルまで達してしまった。アルゴリズムは良くなることはあつても、悪くなることはない。コンピュータの性能も指数的に向上していく。自動車の自動運転も、いよいよ視野に入ってきた。生産現場やコールセンターなど、すでに見えないところで私たちの生活に入り始めているが、近い将来、目に見える形で生活の中にどんどん入ってくるようになるだろう。

そして、人間が得意な分野がはっきりする中で、人間が携わる仕事の内容自体が変わつていく。地域は、自らの個性を尊重しつつ、地域の魅力を高めていかななくてはならない。

富山文化が東京文化にならない以上、富山らしさの良いところを再認識し、それをさらに伸ばしていかなくてはならない。たとえば、東京が人間関係を希薄にしても効率至上主義を目指すなら、富山はたとえ非効率的でも社会生活の質をもっと高めることを考えてもいいのではないか。それでも、優れた人材を外部に奪われることのないレベルまで高めていければいい。他地域に人材を取られるのではなく、逆に優れた人材が集まる文化をつくることで、次世代での豊かさを考える必要がある。

目前に大きな変化が迫った以上、黙って手をこまねいているわけにはいかない。経済的に余裕がある「いまここ」で、将来に備える文化に投資すべきではないか。地域も経営する時代になったのである。

目に見えない文化は、どのように継承されていくのだろうか。それは、五感を通じた経験、行為、地域固有の祭りや慣習などの実践的な共有を通じて、時代を超えてつながっていくのである。社会構造の基本は人と人とのつながり方であるといったが、人々が集まるところで文化は生まれ成熟されていく。だから、文化をつくるためには、五感を通じた経験の共有をデザインすることが特に重要である。言葉もちろん重要であるが、言葉だけでは決して文化は生まれない。文化創造のためには、それ故、多様な人々の協働が文化に及ぼす意義を言語化し、見えない文化を人々に見るように工夫しなければならない。

私たちは、そのために五感を通じた経験の共有を、6つのキーワードで表すことを考え

先ほど企業文化について触れたが、優れた社風を持つ企業の多くは、日々の自分たちの活動を通じて社会の中で実現したい目標・ビジョンが社員の間で共有されている。もちろん、同じ集団であっても、地域と企業は全く異なる。地域の目指すべき目標や夢は、企業とは比べ物にならないくらい多様かつ複雑である。その割に、トップの権限も利用可能な資源も限られている。したがって、問題解決には比べ物にならないくらい困難が伴うはずである。だからこそ、マニユアル人間ではなく、主体的に判断し行動する人々が重要になる。そのような人々が、地域に対する誇りを持ち、問題を論理的に認識し、夢を共有していくような行政の取り組みが重要になる。

すなわち良き文化創造には、富山市のさまざまな問題を自分事としてとらえ、将来の富山市の理想と一緒に考え、それに対して主体的にかかわっていく人々の心が必要である。

てみた。静、健、結、感、創、夢である。この6つは互いに関係している。どこから始めてもいいが、まず人々の健康が第一。ただ、体だけが健康でも心が病んでいては駄目である。そこで重要なのが、社会生活の中で心の安全基地をつくる静である。この二つは、地域の人々がポジティブに変化を捉えるための基盤である。創は、まさに変化を生み出すイノベーションを意味するが、そのためには結、感が重要になる。集団が協働する中で知識創造を起こすためには、知識の多様性・異質性の確保、そのために必要な異質な社会との交流、それと感動したり共感したりする感じる心の二つの条件が無くてはならない。前者が結であり、後者が感である。夢は実現したい目標であり、一人ひとりの行為を引き起こす原動力・エネルギーである。夢が無ければ、物語は始まらない。

実は、このような趣旨で現在でも多くの活動が行われているはずである。新たな富山文化をつくるために行政に強く求められるのは、日々行われている多様な人々の活動を、新しい文化創造に結び付けて解釈し、わかりやすい言葉で人々に語り続けることである。そして、これまで無関係と思われていた諸活動を、静、健、創、結、感、夢というキーワードとつなげることでその意義を拡張し、実践知を形式知に転換し、文化創造という観点から相互関連性を示し、広く人々に公報していくことが重要である。行政が身近にあることが地方都市の有利な点かもしれない。輝く富山文化を築いていくために、実践を伴う産官学をあげた統合的コミュニケーションが望まれる。





次のような状況を想像してください。

——まちの皆さんが暮らしているのは峠の集落です。交通のライフラインは峠を走る道路だけ。その道路が大きな落石により寸断されてしまいました。岩の大きさは10数メートルを超え、重さは20トンほどであろうかというもの、まちの皆さんが集まり全員で一生涯命岩を押すのですがピクリとも動きません。陣頭指揮をとっているリーダーは躍起になるも、少しずつ「こんな大きな岩が動くわけない」との声が出だします。やがて水や食糧が尽きかけ、人々に疲れもみえはじめます。あちこ

ちで小さなめ事が起きるようになり、大きな声でわめく人、心の中で泣き叫ぶ人……：：：：拾がつかない状態となりました——さて、皆さんはこのような状況になった場合、どう立ち振る舞い、またどう行動されますか。

このような状況下に置かれると、人は比較的すぐに「参加する」「全力でやる」「一生懸命やる」と口にします。ところが、この岩が簡単に動かないと気づくと態度や発言が変わり、永遠に続くかもしれないこの挑戦に、あきら

めと落胆の気持ち芽生えます。少しずつ力を溜めておこうと無意識のうちに体も心も反応しはじめるのです。同時に、周りの皆も力を出し切っていないのではないか、それなら自分が力を温存するのも当然だと思ってしまうのです。表面的には一体感を保ち続けているものの、本能の部分ではズレが生じてきます。これはある意味、生きのびるための防衛本能といえるものです。目的をもって皆で約束したはずの集団行動の中でさえ、自分という存在を最後まで生き残させるための方法を探るところがあります。

これは、人間が持つ生き抜くための本能であり、完全に拭い去ることは難しい、集団行動の中で生じる必然的なものです。

前段の話には、隠された秘密があります。道をふさいだ岩は、その場にいる全員が101%の力を全員で集結すれば動くという

のです。もし、その秘密を知ることができ、それを全員が信じ一人も欠けることなく同時に101%の力を込めれば、岩は動き道は開放され、その日のうちにいつもの生活に戻れるのです。ところが人々には、それを知る術がありません。知らないがゆえに、自分自身の身を守ろうという意識が働き、力の出し惜しみをしてしまいます。結果が分かっていたら、誰もが心と体を集中し、101%の力をその瞬間に出し切ろうという姿勢を見せるはずなのに。

個々の力の大きさは問題ではありません。それぞれが、自分のもつ力のすべてとプラス1%を集結して出し切ることができるとどうかがポイントです。そのためには、少し自我を抑え、岩が動く信じ、従順に集団のために自分の中にある常識や限界という枠を越える取り組みを覚悟し、力を使いはじめ、そして力を

大西 一平

おおにしかずひら

フロラグビーコーチ、元神戸製鋼ラグビー部キャプテン

大阪市立董中学校時代、素質を見込まれ野球からラグビーに転向。大阪工業大学高等学校に進学、卒業後ニュージーランドで一年間ラグビー留学をする。帰国後明治大学に入学。壊し屋の異名を誇った。4年の時主将として伝説の「雪の早明戦」に主将で出場した。卒業後1989年(平成元年)神戸製鋼に入社、同社ラ

グビー部(現神戸製鋼コベルコスティーラーズ)に入部し大八木淳史、平尾誠二らとともに90年代前半の黄金期に活躍した。1991年から1993年までは主将を務め、7連覇の立役者として活躍し95年引退。日本人初のプロコーチとして活躍し、日本ラグビー界の活性化に尽力している。また、「歩く人」。プロジェクトを主宰し、東日本大震災の被災地支援を中心に、全国各地にてウォーキングプログラムの普及に努める。

出し切ることだけを考え行動することが必要となるのです。

「絆」という言葉があります。「絆」は、成功や何かの結果が出た先に、それは外的な力が働く場合や偶然の中でも生まれるものだと思います。私の実感では、人のために自己犠牲の精神と覚悟を決めた時、先に己の中にはその人に対する想いによって「幼い絆」が芽生え、その人に尽くし繋がり、お互いの間合いに本当意味の「絆」が成長するのではないのでしょうか。

結果にとらわれず、何ごとにも誠実に全力で挑み続ける人は、結果を見据えて力を入れたり抜いたりする人に比べると、成長速度が驚くほど異なり、一年もすればその差は大きなものになるのは明白です。

日本人は他の国の人に比べ、明確な動機づけがあり継続環境が整っていても信じきり

めに、変えるべき行動や強調すべき行動の具体的な指針を示す、まさにリーダー的な存在です。

ゆえに今、深い共感と共振をもとに、「まちの発展」「文化の創造」を目指すのならば、行政は自らが市民に対する自己犠牲の精神と覚悟を決め、まちづくりのリーダーとならなければなりません。

「文化の創造」とは、そんなリーダーの指針に基づき、市民がその指標を従順に受けとめることから始まります。

幸いにして富山市は、すでにより良いまちを築くための、文化創造に基づく多くのモデルをもっています。自己犠牲の精神と覚悟をもった「強い絆」を感じさせる歴史を重ねたリーダーたちの取り組みが、すでに成果として現れています。

今回作成された「文化を創造するまちづく

ず、物事に全力で取り組む規律や一貫性、行動性に欠けてしまう習性を感じます。例えば話にあった、岩を動かすために全力で挑まなければならぬのに、どこか懐疑心が芽生え、自己保身のために力を出し惜しみしてしまう、そのような心境の変化と行動は、誰もが持ち得るものであり、決して否定できるものではありません。

そこで必要となるのが、人々をまとめ導くことができるリーダーの存在です。岩が動く秘密を知らずとも皆の生存に向けた可能性を探り、具体的な指針を考え打ち出し、強靱な精神力で岩は動くと言説。自らが先陣に立ち働き、みんなを奮い立たせ、ひとりも漏れることなく全員に100%の力を集結して出させることができるリーダーです。

まちに住む市民にとって行政は市民に正しい導きをし、よい方向へとまちを推進するた

りの指針にはこうあります。

「将来にわたってより一層の魅力を放つまちとして存続していくためには、市民ひとりひとりが郷土に愛着と誇りを持ち、住むことに幸せを感じ、いつまでも住み続けたいと願うまちを、市民、企業、行政が一丸となって追求し、実現してゆかねばなりません。」

そして文化を創造するまちづくりの指針として、この理念の実現に向けて、「富山らしさ」を踏まえた、具体的な6つの指針が示されています。

質実、進取の精神風土を尊び、「静」「健」「結(ゆい)」「感」「創」「夢」、この6つの指針で、新時代のとやまを築くと。

これは学術に則った理論や夢追い人の空想ではありません。歴史を歩んできた先人たちの英知と、その先人たちを支えてきた歴史や風土などを、今あえて、次の時代のために明確

にしたものです。

この6つの指針をより具体化し、一つひとつを確実に推進させるためには、市民一人ひとりの明るい未来へ向けた具体的な行動の改革が必要であり、そして市民全員の渾身の力を込めた、一斉に前進する力が必要となってくると考えられます。

次頁の表「年齢区分別将来人口推計」は、内閣府が発表したデータです。

2019年には、先に日本代表が活躍したラグビーワールドカップがこの日本で初めて開催され、そして翌年の2020年には東京オリンピック、パラリンピックが開催されます。2015年と2020年のグラフを見比べると、目に見えるほど人口減少、少子高齢化が顕著です。

これは、生活するまちのすぐ近隣で、誰かが寝たきりに陥ったり、亡くなっていくことを

れた「絆」が存在しています。それは、まちですれ違う際に、「今日の立山は綺麗やったねー」という朝のあいさつが交わされているのを聞くだけで実感できるのです。

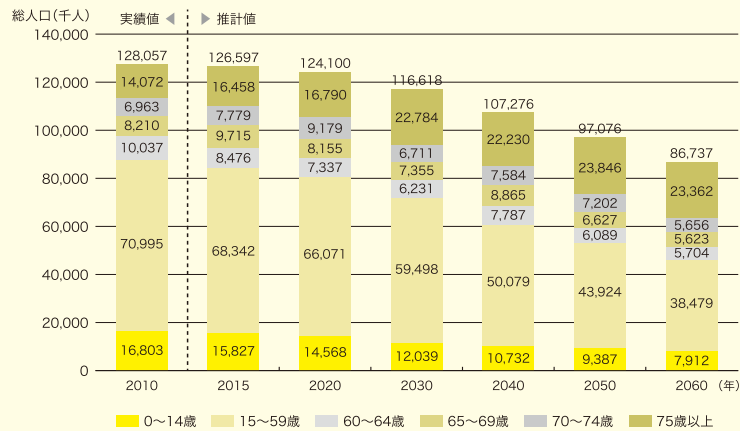
示すとともに、働き盛りの年代には大きな負担がかり、ストレスや過労の日々がすぐ横にいる家族にのしかかることを意味しています。この未来を見据えた棒グラフの落ち込みをできるだけ滑らかにし、そこに起こるであろう問題に、市民一人ひとりが自分事である自覚を持ち、すぐにでも何か行動を変えることは急務です。

今回の文化を創造するまちづくりの指針には、この背景にある、これから起こる必然の問題に対し、市民全員がしっかりと準備する具
体策の前段が示されています。今後、この6つの指針に基づく具体策が明確化され、進むべき道が明らかにされるにはそう時間がかからないでしょう。

私は実感しています。富山市の人々は、他の地域の人々とは違うと。富山市には、市民を想うリーダーシップと、歴史と文化、風土に育ま

将来推計人口でみる50年後の日本(内閣府)

年齢区分別将来人口推計



資料:2010年は総務省「国勢調査」、2015年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果 (注)2010年の総数は年齢不詳を含む。



第2章

文化を創造する
まちづくりの指針に寄せて



スローライフを大切にするまち

関 幸子



プロローグ

富山と聞くとある記憶が鮮明に思い出される。私が富山にかかわりを持つようになったきっかけは、平成21年に麻生太郎総理大臣が首相官邸で開催した「地域経営懇談会」であった。この懇談会は、現在の地方創生の礎となる会議で「地域の現場で地域経営を担う市町村長や、地域の経営に関する豊富な知識と経験を有する民間経営者、学識経験者と意見交換する場を設定し、地域の経営力を高める方策を検討し、もって内閣総理大臣への進言の参

いるようだ。

富山の佇まい

富山には本物がある。富山市の政策参与として就任し富山に通うようになってすぐに気づいたことは、富山の美しさと静ひつさである。実は富山は、白馬、立山、穂高、乗鞍が連なる日本の尾根である日本アルプス連峰の向こう側にあつて、東京からその姿は見えていなかった。いや見ようとしていなかったというのが真実だろう。

ところが、一歩足を踏み入れると、人を虜にする雄大な景色と佇まいがある。3,000メートルを超える立山連峰を背にして、扇状地として富山平野が広がり、幾筋もの川が富山湾に注いでいる。その姿は、飛行機から立山を超えた瞬間に目に飛び込む。加えて、日本の三大散居村の一つとして、6月には屋敷敷に

考とする「趣旨の会議である。参加したのは、

自治体の首長をはじめとして学識者、NPO法人の代表など20人。私もNPO法人地域産業おこしに燃える人の会代表として出席していた。各人が持ち時間枠を超えていたらと話す中で、森雅志富山市長はきつちりと時間内に意見を収め、富山市のまちづくりの手法を明確に示した。その斬新な手法とリーダーとしての自信と情熱にあふれた勢いの姿に、驚きと羨望のまなざしを向けたことを、昨日のことにように思い出す。それから7年、富山市は今も、そのエネルギーで導かれて

囲まれた大きな邸宅が水面に写り、日本の古の農業の姿を今に伝えている。富山湾を見れば、水深1,000メートルの豊かな海が育んだ白エビやほたるイカが、魚市場にあふれ仲買の元気な声がこだまする。

岩瀬では、日本酒の酒蔵が軒先に杉玉を吊し、北前船の廻船問屋が現存し、伝統家を改造したレストランでは、外国人がフランス料理と日本酒を楽しんでいる。

私が最も気に入っているのは、実は富山の澄んだ空気である。富山で暮らしている方は、当たり前すぎて気づかないだろうが、空気が静謐であり、肌染み渡る冷たくて清々しい空気こそが富山を象徴しているように感じ

伝統に育まれた奥ゆかしさ

富山は日常を大切にする。富山に派手さは

関 幸子
せきさちこ

(株)ローカルファースト 研究所代表取締役、富山市政策参与
三鷹市役所、財団法人まちみらい千代田にて、30年間地方自治に携わる。
その間、基本計画、女性行動計画、高齢者福祉計画、産業振興計画、次世代育成計画策定、ビジネス支援図書館の推進に携わる。
加えて、三鷹市では中心市街地活性化法のTMOとなる株式会社まちづくり三鷹しSOHOCITYみたか構想を推進し、日本で最初の公設公

営のインキュベーション 三鷹産業プラザ等4つの施設を整備。また秋葉原タウンマネージメント株式会社を設立し、都心のエリアマネージメントを実践。2009年10月から10年9月まで、内閣府企業再生支援機構担当室 政策企画調査官(非常勤)として、地域再生にも携わる。

ない。例えるならば、金沢が「晴(ハレ)」で富山は「曇(ケ)」の存在となろう。富山では毎日と普通が上質である。特に食は格別である。富山で寿司屋に入ることには本当に楽しい。東京では高級寿司屋でしか出ない寿司ネタが、富山では回転寿司店でも食べることが出来る。富山湾では500種類もの魚がとれ、海と店が近いことで新鮮な魚がその日のうちにカウンターに並び、魚の旨みを引き出す昆布締めもまたいい。生で食べる以上に魚の味が引き立つ。さらに、富山の水は日本名水百選に選定され、水がいいので酒と米が美味しい。私のお気に入りは「満寿泉」。酒販免許を獲得して全国の酒を飲み比べているがこれは抜群。すつきりとした切れ味とともに米本来の甘みと香りのバランスが絶妙である。

葉の富山を体現できる葉膳も富山を代表する食である。専門の葉剤師がいる老舗葉膳店もいいが、家庭での毎日の料理に葉膳が根付

くれた。その主人の顔を見ると、80歳を優に超えている。でも元気に毎日、畑に出て梨の手入れと出荷をしているという。若い頃の様子を聞くと、貧しさとの戦いであったという。自家量だけで出荷すると安くたかれる。そこで近隣の農家をまとめ、一定の量を定期的に出荷できるように組合方式を確立した。今では、周辺農家よりもこの地区では所得が高いという。近隣農家をまとめ、売り先を確保するなど、地域の中心的な役割を果たしてきた。ご苦労も多かったと思うが、そのことは一切言わない。少し丸くなった背中が、その苦労を語っている。

梨は色つやもよく、大きく重い。梨の自慢も一切しないが、主人自ら剥いてくれた梨は、みずみずしく甘かった。

富山には、多くの観光名所があるが、訪問者が魅了され、また行きたいと思わせるのは、「人間」なんだと感じる。人は人を呼ぶ。この

いている。冬にはぶり大根、イカと里芋の煮物、夏はミョウガ寿司、ツバイソ茄子が食卓に上る。これは漢方の「陰と陽」の考え方に基づいて、冬は身体を温める素材、夏には熱を冷ます素材で献立を用意しているからである。器も、加賀前田藩の伝統を受け継ぎ、菓子盆、茶たく、箸等の漆器も普段使いであり、最近では富山のガラス工房育ちの若手作家が作った、オリジナルのおちょこやグラスが食卓に華やかさを出している。本物が身近にある。それが富山だ。

人が人を呼ぶまち

富山の人は口べたである。富山の人は多くを語らない、自慢しない。数年前、八尾のおわら風の盆祭りに行った折に、途中の梨農園で梨狩りをさせてもらった。雨上がりということもあり、長靴と軍手を用意して待っていて



富山市八尾町三ツ松

老主人のごとく語らない人こそが最大の宝なのだ。

「静」から「動」への胎動

富山が動き出した。昨年夏にオープンした富山市立図書館の初期コンセプトを、9年間の司書経験者として、元公立図書館の館長として提案させていただいた。その芯となるのが「静」から「動」への図書館である。これまで図書館は、本を読むために静かにするところと思われてきたが、今図書館はその姿を大きく変えようとしている。欧米の図書館は、IT化が進む中で、蔵書と本の貸出という基本機能にとらわれず、暮らしの真ん中に図書館を置き、交流が生まれ、学び、憩う場所・空間として図書館を楽しんでいる。この楽しむという考え方が大切だ。さらに図書館は、ITが進む中で教育、読書という枠を超えて、就労、ス

成分の調査はイタリヤの研究所と連携して行うことで、葉の富山が海を渡る。

環境未来都市の動きも世界が目をつけている。電気をあまり使わない生活様式、超高齢化に対応するために、LRT等の公共交通機関の整備、コンパクトなエリアでの暮らし方など、持続可能な社会経済の仕組みを富山は創造しつつある。それによって、東京ではなさない新たな価値を創造し「誰もが暮らしたいまち」「誰もが活力のあるまち」の実現に向かっていている。

エピソード

富山の暮らし方は、スローライフであり、富山の街はスローシティである。そしてアメリカの街である。スローライフとは、急がないでゆったりとして、画一的なものでなく地域に寄り添った個性的な暮らし方を指している。

キラアツプ、創業、マーケティングなど、生きるうえでの経済活動へのサポート機能を纏うことになる。富山市立図書館は、中心市街地の商店街の中に移転し、商店街のコア集客施設としての役割を果たそうとしている。ガラス美術館との融合もまた、楽しさをより一層引き出している。図書館は、笑い声やビジネス会議が行われ、人が出会うきっかけのうるさい図書館に生まれ変わる。

地方こそが世界に通じる

富山は世界に向かう。東京よりも世界に近いのは富山だ。地方創生の取り組みの中で、富山は独特の動きを見せている。一団の耕作放棄地(24ha余り)を市が所有し、民間企業に貸し出し、荳胡麻を育て、その荳胡麻から抽出した成分をサプリメントにして販売する。そんなプロジェクトが動き出している。抽出したスローシティとは、急いで通りすぎるのではなく、立ち止まって佇んだり、じっとしていたり、そこに滞在し暮らすことを楽しむことができる街のありようを指している。

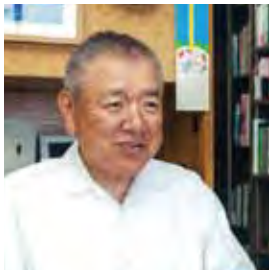
富山は既に、その「スロー」な本質を、伝統と文化を土台として持っているだけでなく、景色、食、空気、人間関係をさらにもっと上質にしようとしている。富山は動き出しておりその勢いは今後も止まらないだろう。その理由は、これまで一部のリーダーや関係者だけが、富山の方向を望んでいたが、地方創生の中で、多くの市民がそれに気づき、一人ひとりが自ら富山から世界に向かって声を出し、扉を置けようとしている。北陸新幹線の開通もまた、さらなる拍車をかけるだろう。富山はさらに勢いを増して、本物になろうとしている。私も一緒に並走したい。富山は、そう思わせる街だ。



健

歩くことが楽しくなるまち

長友 啓典



富山市に関わりを持ったのは20年ほど前の話になる。それまでは一度も足を踏み入れたことがなかった。富山市八尾地域の「おわら風の盆」が評判となり、友人達と行ったおり、金沢はおろか近辺のホテルは満杯で富山の駅前に宿泊したのが最初で最後というほどに富山とは縁がなかった。それは、ひょんなことがきっかけであった。

貫場幸英、小泉誠、広谷純弘の三人が黒田征太郎（ボクの事務所「K2」のパートナー）を勧誘にやってきた。大山町のアートイベントへの参加を要請するためである。黒田にして持った三人の話を聞くうちに、今まで縁もゆかりもなかった富山という土地に魅力の一片を垣間見ることが出来た。

その企画に参加することになり、最初に訪れた時はまだ大山町は富山市ではなかったが、彼らが制作した福沢地区コミュニティセンターを中心とした街の標識、バスの停留所等、建造物の完成度の高いデザインセンスに驚かされた。卓越した考え方の上に立ち、街を俯瞰する見方に感心した。富山との関わりはそれ以来である。当初はまだゲストとして参加する程度であったが、大山町が富山市となり10年となるが、その三年前から新しく名称も「リビングアートイン 大山」と変わったあたりから本格的にそのプロジェクトに参加することとなった（小見地区コミュニティセンター、大庄地区コミュニティセンターは既に完成していたことになる）。大山総合行政センターの山元所長（当時）からのお誘いで富山市

もボクと同じで富山とは無縁の場所のため判断がつきかねるので、相棒のボクにその会議に同席を求め、話を聞くこととなった。貫場氏がプロデューサーで、小泉誠氏がインテリアデザイナーで、広谷純弘氏が建築家という紹介を受けた。新進気鋭の若者達（ボクたちにとって）はその業界では有望視（20年後の現在では全国区で名の知れた方々となっている）であった人達であると知った。よくよく話を聞いてみると、子供たちと一緒にアートと文化を媒介とした街おこしをしようといった可成り面白い、興味のある話であった。熱き心

の政策参与の任務を仰せつかったのもこの頃であった。時を同じくして、僕のライフスタイルにアササン（朝の散歩）とブログ（写真日記）が加わった。アササンは一時間から一時間半ほどの散歩での散歩のことである。きっかけは今はやりのメタボリック症候群が気になったからだ。ようするに肥り過ぎということをドクターに言われて歩き始めた。かれこれ20年程続いている。今では一日か二日アササンをお休みすると身体がなまり、自然に歩く事を欲求するようになった。二泊以上の出張には必ずシューズ、ウェアをカバンの中に忍ばせている。

もうひとつのブログ（フェイスブックもある）とは、ご存知ウェブ上での公開日記の様なものである。毎日毎日の諸事雑感である。このふたつに共通する事は、普段あまり気

説に挿絵、エッセイ連載など幅広く活動。富山市政策参与 日本工学院専門学校グラフィックデザイン科顧問 東京造形大学客員教授

長友 啓典
ながともけいすけ
グラフィックデザイナー
1939年大阪生まれ
1961年桑沢デザイン研究所卒業。日本デザインセンター入社。1969年黒田征太郎とK2設立。1984年 講談社出版文化賞「さしえ賞」
2001年第22回日本宣伝賞山名賞、2006年第37回講談社出版文化賞「ブックデザイン賞」等を受賞多数。エディトリアル、各種広告、企業CI、及びイベント会場構成のアートディレクションを手がけるほか、多数の小

にしていないが僕達の住んでいる日本が素晴らしい四季に恵まれているのに気がついた事である。雪が降り、春一番が吹くころ、梅の花から桜の花へと開花が始まり、桜前線として日本を北上する。夏になり、紅葉を愛でて、冬を迎える。毎日毎日のアササンで、路上の花、公園の花、庭先の花をスマホで撮っている。それらを見直して見ると素晴らしい四季がそこにある。

僕の場合、毎日毎日の食事でもスマホで撮影している。ついつい食べ過ぎてしまうので、写真に記録しておけば多少は食べることを自己規制するかと思っていたがなんのなんの、あれも食べたい、これも食べたいと今まで以上に量が多くなっていく始末である。それはともかく、春夏秋冬、食卓に出てくるものは旬というものがあ、それぞれ舌で、目で、季節を感じる事が出来る。それを感じた時は、ほん

のもてなしが素晴らしい。フランスの田舎にあるブチレストランはかくありなんと思ってしまう。私たち川沿いの寿司屋も素晴らしい。ぶつきらぼうなご主人に最初は戸惑ったが何度か行っているうちに親しくなり、今では店が終わってからでもお付き合ひ頂く程だ。富山湾の旬(車えび、まごち、岩ガキ、時には鮪：等)というものをふんだんに出してくれる。関係ないが目茶苦茶ジャイアンツファンのご主人と根っからのタイガースファンのボクがカウンターを挟んでお鮓をいただく凶は友人達は気が臭いじゃないらしい。緊張感が漂っているようだ。

僕のカレー好きは自分で言うのもなんだけど「そこそこ」のものがある。その僕がうなつたんです「旨いー!」と。そのぐらいイケるのだ。立山山麓、本宮にある。ここのご夫妻もなんとも気さくな人達で、いつも笑顔で迎えてくれ、

とうに日本に生まれて良かったと思う時である。

富山を訪れる様になって感じたのはこのことで、立山山麓からの雪どけ水が富山湾に流れ込んで雪どけ水と海水の合流に依って独特の漁場が出来、その富山湾の「海の幸」と立山の「山の幸」が素晴らしい食材として四季折々提供されていると言う事を感じた。

富山に行くとき必ず立ち寄るお店が三軒ある。ひとつはまちなかのフレンチレストラン、いち川沿いのおすしやさん、立山山麓のカレーショップである。フレンチレストランのシェフの小西さんはこの道四十年。富山以外からも越境して食べにくる人が多い。それこそ四季折々の富山湾の魚貝類、立山山麓の野菜類(こみ、ぜんまい、よしなにとらの芽)を見事に使いこなしてのフレンチの評判はスゴイものがある。奥さん、お嬢さん、小西ご一家

東京の美術大学に通っていたお嬢さんが今は実家に帰られ手伝っておられるのが何だか嬉しい。どうして富山の人達は人情をふりかざす訳でもなくこんなに気持ちが良いんだろうと思ってしまうほどだ。いわずもがなの事だけど食材ももちろんだが料理の基本は「愛」なんですよね、都会に住んでいると忘れがちな色々なかたちの「愛」なんです。地方に行くとすぐくそれを感じます。その愛ある人達が一様に推薦してくれるのが、富山のお土産、数々の名品があるなかで「小林」の鱒ずしなんです。素晴らしい美味いもんです。

富山と言えば「八尾の風の盆」、「黒部のダム」、「永見の港」、「近辺の金沢」、足を伸ばして「能登」、「温泉」と沢山のことを思い浮かべることが、豊富な食材でつくられるお料理は当然のこととして、まだまだライトレベルでの市内観光、岩瀬浜のまち歩き、美術館の数々、文化面に於いても盛り沢山である。まだまだ知

られていないが富山市内はほとんど奥深く、侮れないところですよ。

ここでボクが推奨する2、3の「歩く」コースをご紹介します。

富山市水橋の堤防沿いのコースが好きだ。桜の季節が良い。常願寺川（日本一の急流と言われている）の途中に、リビングアートのチームが制作したベンチ類を配したちよつとしたお休み処がある。そこからまだ積雪が残っている立山山麗を眺めながら、ホットウイスキーをいただく極上の時間は堪らない。堤防を少々下り海岸に降りると、そこは一面の小石が敷き詰められている。立山山麗から急流の常願寺川を経て辿り着いた石が累積されたものだ。これらの石が打ち寄せる波で奏でる「コロ」「コロ」という音が何ともいえない。貫場くんはこの音を聞いた時からこの海岸を「コロコロ海岸」と命名したほどだ。長い道の

りで研磨された石の造形が可愛く、思わずポケットに入れ持ち帰り、絵をちよつと施し、今も事務所の机の上に飾ってある。

時間が許せば大岩山、日石寺の滝に打たれることをお勧めする。霊験あらたかな滝修行である。修行となれば大袈裟な感じだが、Tシャツ、短パンの簡易さでお許しを得られるので大丈夫だ。身が引き締まる思いがした。歩くことの仕上げはこれに限る、ことあるごとにお邪魔する。

福沢地区のコミュニティセンターからのコースも1時間半ほどのウォーキングが楽しめる。里山を上りきれば富山市内から立山連峰、富山湾と360度の景観に触れることができる。辺りは文教地区で富山国際大学や職藝学院、中高一貫の片山学園などがある、豊かな自然環境の中でたくさんのお学生たちと出会う。

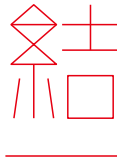
市内のホテルに滞在中は富岩運河環水公園に足を運ぶ。ここは世界一美しいと言われているカフェがある。最近「歩く」ことを誤解されている節が見受けられる。汗水垂らして競技のように速歩で歩くことを良しとっておられる（昔はそう言っていたが）が、最近はずく、ゆっくり、を繰り返す、時にはこういったところで休みを入れてお茶をする、といった「歩き方」が主流となっているようだ。

話が長くなりそうなので、そろそろ終わりますが、ボクが20年近くあちらこちら国内、国外と歩いてきたなかで富山市での「歩く」コースは、世界中で5本の指に入る快適さである。早く市民の方々に気が付いて欲しいといったところだ。住みたい街のナンバワンなんだから。



どこから見ても立山連峰が美しい富山ドライブ





「結」交流力が発揮できるまち

国吉 直行



交流力から新たな活動を育む都市へ

富山市は過去10年ほどの間に、日本を代表するヒューマン・シティ（人間環境都市）と呼ぶにふさわしい都市に変貌しつつあります。現在はまだ、最終ゴールへの途中にありますが、着実に、市民が豊かに暮らせる都市へ向かって進んでいることを感じます。

私は、4年ほど前から、主に景観演出や都市デザインの領域で、富山市のお手伝いをさせていただいています。お手伝いしたのは、景観ガイドラインづくり、まちづくり関連部局と

軸とした「串と団子」の都市構造とコンパクトシティなど、富山市独自の個性的な都市空間形成戦略を進め、この点では日本の他の都市の追随を許さない成果をあげています。今後は、団子にあたる駅周辺の拠点的地区と、伝統文化の引き継がれた郊外の拠点地区や豊かな自然地帯などの特徴的な空間形成を進められると思いますが、さらに最も重要なことは「各地区の個性的な活動の創造」です。

富山市には、八尾や岩瀬のように伝統ある街並みがあり、自然豊かな大山のような地区もあり、LRTやレンタサイクルなどで自由に動けるモダンな中心市街地もあるなど空間的にはすでに魅力いっぱい都市になっています。また、それぞれの地区では、様々な市民活動が行われています。伝統文化の継承の活動から、新たな文化創造に関する活動まで。私も、こういった民間主体の様々なデザインイ

の協働、アメイジングTOYAMAデザイン選定、バナーフラッグデザイン選定、キラリの店舗選定などがあります。

こういったお付き合いを通じて感じましたのは、自治体の取り組みとして、都市づくりの戦略の先進性と総合性があり、コンセプトがはっきりとしている点です。市長さんから職員まで、さらに民間団体まで実施面での一貫性と着実性、幅広さがあることなど、驚嘆するばかり。

富山市はすでに、LRTなどの公共交通をベントや交流会などに参加させていただいたこともあります。

私は、2013年に「富山ー横浜インターンティフォーラム in 富山」というミニシンポジウムを開催したことがあります。これは横浜の専門家たちと富山の専門家たちが富山の都市デザインを議論する交流フォーラムとして開催し、翌年、横浜でも開催、その後も、富山で活動する若手専門家たちと、横浜の専門家たちの交流が継続するきっかけとなったことがあります。また、大学の夏休み期間の研究学習の場として富山市を選び、ゼミ学生20名ほどを率いて富山市に滞在し、富山市の街を楽しみ、独自の都市づくりを勉強させていただいたことがあります。このように、外部の人間が富山市を訪れて学び、議論し、交流することは大きな意義ある体験になります。

富山市の都市づくりは、国際的にも評価され、注目を集めています。富山を舞台に、都市

国吉 直行
 くによしなおゆき
 都市計画家、都市デザイナー、横浜市立大国際総合科学部特別契約教授、富山市政策参与
 横浜市企画調整局に入庁し以来40年余りにわたってインハウスのアーバンデザイナーとして横浜市の都市デザイン行政を担当。都市計画局都市デザイン室長を経て、横浜市都市整備局長上席調査役・エグゼクティブアーバンデザイナーを歴任。

づくりの現場を学び、議論をすることについて、多くの人が関心を持つと思います。

私は、近年、日本での都市デザイン活動実績を評価され、アジアの都市から都市デザインへの助言協力要請を受けるようになり、韓国やマレーシアの都市では、実質的な計画づくり等もお手伝いしています。

こういったアジアの都市の市長さんと話しをしますと、意外なことですが、各都市が目指しているのは、シンガポールや上海といった超高層の建築物群のある高密度な経済都市の繁栄を追うのではなく、それぞれの都市の地形や文化、歴史といった固有の資産を活用した市民の生活空間としての豊かさであり、持続的な都市の発展です。あわせて、市民や訪れる多様な人々が交流し、互いを高めあう仕掛けを持った都市です。富山市はまさに、その見本となる都市だと感じました。

ていますが、私は、普通の観光客増大をメインとせず、富山市を舞台に、市民や、国内、海外からの多くの人々や専門家、企業人が継続的に学びあう交流こそが、富山市の持続的な発展戦略にふさわしいと考えます。OECDでも

富山市の都市づくりの実績や固有の活動をい

かした市内、国内、国際交流システムの構築

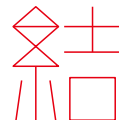
「富山市 文化・まちづくりアカデミー」

富山市は、すでに市民の交流の場づくりに関して、先駆的試みを行っています。総曲輪グランドプラザという市民交流、活動発表の場としての「まちなか広場」は画期的空間であり、グランドプラザの近くには、富山まちなか研究室MAG.netという大学や学生の活動、交流の場も設けられており、また、富山市産の食品を扱う「地場もんや総本店」もあり、富山市固有の活動の場となっています。

日本政府の最近の戦略として、海外からの観光客の増大を目標とした交流人口の拡大による、各都市の経済活性化が重視されています(インバウンド観光)。富山市においても、北陸新幹線開業による観光客の増大が期待され

評価される、環境モデル都市、コンパクトシティなどの都市づくり領域は、富山で学び議論するテーマとして最適です。デザイン分野、農業分野など富山流の様々な産業も軸となります。文化などをテーマとする場合でも、

指針
3



ハナーフラッグとハンギングバスケット

富山で学ぶ、富山で世界が交流する、富山から創造が始まる。



アジアの都市が都市づくりを学ぶ(横浜)



アジアの学生が文化都市を学び、提案する(韓国光州市)



創造都市政策を議論し交流する(フランス・ナント市)

必ず、富山市が成果を残してきた、コンパクトシティなどの総合的な都市づくりを絡めた議論、研究とすることにより、富山独自の特色ある活動としてアピールすることができると感じます。

2015年の「エンジン01文化戦略会議オープンカレッジ」や、2016年の「エンジン02」なども有意義なイベントです。このように、富山を舞台に専門家が集まり議論をし、富山が学びの場となり、各界に刺激を与え、新しいことの始まるきっかけとなることは、今後の富山の役割として有意義だと思います。

今後は、「エンジン01文化戦略会議」という専門家集団の全国展開の会議の富山での開催という形でなく、富山市独自のメンバー編成による継続的な交流活動の一環として、富山独自の活動として展開させるとよいと思います。

私はアジアの各都市で都市づくりの講演などを行う際に、富山市の取り組みを紹介し、大きな関心を受けています。アジア都市に期待される都市としての市民交流、都市間交流、専門家や大学を交えた、学び創る交流が次代の重要な活動となると思います。

富山市独自の都市づくりの成果を軸とした、市民交流、国内、国際交流の官民の総合戦略とシステム構築、グランドプラザや国際会議場などにとどまらない新たな交流空間の充実、市内各地への配置と活動の展開、具体的活動を期待します。

「魅力的な環境都市、人間都市(「人間環境都市」)で学ぶ、研究する、議論する。」

富山市各地区が交流・学習・研究の拠点となる「富山文化・まちづくりアカデミー」活動の展開などいかがでしょうか。

3 感力(敏感・共感・感受性)が輝くまち
— 芸術の杜 —

須藤 晃



須藤 晃

すどうあきら

音楽プロデューサー・作

家 富山市政策参与

1977年東京大学英米

文学科卒業後、CBSソ

ニー(現S.M.E)入社

1996年より(株)カリ

ントファクトリー主宰

尾崎豊、浜田省吾、村下孝

藏、玉置浩二、トータス松

本、馬場俊英らと音楽制

作のパートナーとして

数々の名曲を発表。言葉

(歌詞)にこだわったプロ

デューススタイルでメッ

セージ性の強い作品を生

み出し続けている。

「人生において大切なことは、何を手に入れたかではなくて何をなくしたのかということである」。これは劇団四季を立ち上げた浅利慶太氏がテレビのインタビュ番組の中で発言していた言葉である。今や日本有数の劇団になりビジネスとしても常打ち小屋を持ち、知らない人はいない演劇界の雄が放った含蓄のある言葉である。僕は富山市の文化事業の未来を見据えるときに、あえてこの言葉を胸に刻み込みたいと思う。

人々の前に立ち、導く役割を担ったものた

てはいないだろうかと考えるべきである。今まで恒例的に行われてきたことを伝統と呼ぶべきか、慣習的な停滞と見るべきか、難しいところである。また一度諦めてしまっていたものを進化させて新たに再挑戦することも文化事業には必要なことである。電燈を消してろうそくを点けてみてはいかがだろうか。

本当に時代はものすごい速さで変化している。情報はインターネットの出現で瞬時のうちに世界中を駆け巡る。たとえばイギリス出身のアデルという女性歌手の新譜は、CDが売れないと言われて久しいこの時代に発売されてすぐにアメリカで1日に400万枚が売

れ、ユーチューブで紹介されて彼女の楽曲のミュージックビデオはなんと2ヶ月ほどで10億人が見たのである。マスコミというものの概念が変わってしまった。マスコミによる宣伝効果、つまりはテレビやラジオや紙媒体

ちには時代を見抜く能力とセンスが求められる。ときにはその取捨選択の決断は矛盾に満ちていることもあり合理的でないこともあるだろう。でも根底に何をなくしていくかを常に憂慮し愛情を持って接する気持ちがあれば、それは勇氣ある決断になるのではないかと思う。つまり常識的な流れを踏襲するだけで文化事業を継続していくことのリスクを避けていくにはいけないと深く思う。手に入れることだけを考えて、何を断ち切っていくかを判断するのではなく、失ってしまうことの中に将来のより良き展開の種がたくさん含まれる

による刷り込み方式の宣伝は影を潜めて、パソコンやスマホを中心にした通信機器での無料映像サイトが一番の宣伝効果を持つてしまった。ツイッターやフェイスブックやラインでの情報交換も然りである。もはやマスコミではなく、ミニコミの延長線上に最大限のプロモーション効果、情報伝達の成果が期待できる世界になっているのである。それらの現実を踏まえて、古い価値観を見直さないと、単なる地方都市の時代遅れな対応を繰り返すことにはならないかと危惧する。おそらくあと何年かで、息つく暇もなく、瞬く間にまたあらゆることが様変わりしていくだろう。

様々な問題が思い浮かぶ。というのは芸術というのは芸術家がいて成立するが芸術家としての常は個人である。産業ではない。企業として組み立てられてはいないので、成長させたり進化させたり計画性をもって進めるこ

とが土台無理なのである。だから文化事業を体系的に推進することには大きな壁がある。

2年後の事業計画はできるが、すべてアウトソーシングである。芸術家を育成していくことができない。できるのは事業を推進する組織の人間たちである。だからそのリーダー達は芸術全般を愛し理解しているものたちが携わることが必至なのである。それが地方行政の一端で文化事業を推進する一番の壁だと思ふ。

例えば映画は産業であるからフィルムコミッションを立ち上げて富山での撮影を積極的に招聘することは可能だが、それをいくらか続けても映画監督や役者は育たない。芸術品と工芸品は違う。芸術は大量生産ができない。

それでもまずは夢を見たい。富山市がどうか音楽の都ウィーンのようになればいいと思ふ。それが何百年後であれ、目指すは音楽や

アートや芸術の香りあふれた街を目指したい。ウィーンには国立歌劇場をはじめフォルクスオーパやコンチェルトハウスなど幾多のホールで大小取り混ぜて毎日のようにオペラやコンサートが行われている。そこまでの規模は無理としても目標は大きいほうがいい。毎日のように賑わうウィーンの公演事情も観客は七割が地元で三割が観光客と言われる。

コンパクトシティのコンセプトのもと世界的にも計画的な街づくりとして認められつつある富山市の文化的なゴールを、途方もない夢にしてはどうかと考える。毎日どこかで何がしかの公演があり、しかも大衆料金なのに優れた演目が目白押しで、旅行で富山を訪れる人の何割かはそれが目的になったら嬉しい。現状では桐朋学園大学院大学や桐朋オーケストラ・アカデミー、富山シティフィルハーモニー管弦楽団や隣のオーケストラ・アンサンブル金沢、また地元高校のプラスチックバンドや合唱の質の高さ、市民参加型のミュージカルの成功、バレエや現代舞踊やダンスに対する熱、海外からの招聘ライブ、芸術創造センターでの市民活動の支援、まだまだ成熟しているとは言い難いが、たくさんの芽が育ってきている。

芸術劇場としてのオーバード・ホールの日本的な評価は高く、県民会館や市民プラザのアンサンブルホールや教育文化会館や県民小劇場、能楽堂などの施設はあるものの、将来を見据えたときに明らかに必要なのは収容キャパシティが五百から千ほどの小ホールや中ホールであろう。オーバード・ホールと隣接した場所にこの施設があれば、一帯がアートの村と化し芸術の杜となる兆しが得られる気がする。種類の多い公演演目、そして値ごろ感のある料金、毎日のように何がしか開催されてい

る芸術の杜周辺に様々な商業施設も増えている絵が見える。

日本全国のいろいろな場所でビエンナーレ（2年毎の芸術祭）が催されている。これもブームに終わらさずに準備していくことも可能性を感じる。そのときに行政だけの予算では広がりには限界があると思う。ビエンナーレではないが、瀬戸内海にベネッセが作った島の芸術村がある。これなども参考になる。一般企業の協力を求めていく方向性も貴重な考え方である。しかもベネッセが現状苦戦している最大の理由は直島へのアクセスの悪さである。その点富山市はライトレールやバスなどの機関を使ったアクセスの機動性もあり、新幹線開通での他県からの誘導も好条件である。ぜひ駅から芸術創造センターを中心とした呉羽山界隈の施設へのレールの延長を検討すべきである。

芸術ということに関して興味深い話がある。往々にして芸術作品は大きなものが価値があるように受け取られて大作として評価されやすいが、必ずしも芸術家にとっては作品の大きさは関係ないという。単純に世間の評価がない時期には大きなものを作る余裕がないという理由だけでできなかったかもしれないわけ、たとえば体育館ほどのギャラリーにたったひとつの彫刻が展示されているというケースもエキジビションの演出としても効果がある場合もあるのだから、何でもかんでもスケールを求める風潮にも問題がある。芸術に関してはことさらである。今後は箱作りに関しても深く留意するべきポイントだと考える。キャパシティばかりを論議している会議は不毛である。

ともかく富山に行つて芝居を見よう、歌舞伎を見よう、コンサートを聴こう、落語を聞こ

とは強者の論理に立つことが重要なのではないか。しかしそれはかなり勇気のいることだ。

都市の成長を考えた時には、なかなか難しい問題を抱える。担当者や責任者は時とともに変遷し、その精神は受け継がれることもあるが、十年二十年タームの進化を計画することは至難の業である。種をまいたものが芽を出して大きな樹になるまで、水をやり日を当て肥料をやり、それでも災害で朽ち果てることもあるわけで、行政における文化事業の継続もそうした問題をはらんでいる。強者が打ち上げた目標を弱者の論理でまかなうことはできない。

自分が富山市の政策参与に就任する前年にグランドプラザが出現し、そのことは大きな刺激になった。いくつもの優秀な施設があり、そこで何をやるのかというソフトの提供は僕

う、ダンスパフォーマンスを楽しもう、美術館でピカソを見よう、そうなるためにはシネコンのような芸術全般を網羅した施設があることが最も望ましい。長い年月がかかるかもしれないが、届かぬ夢ではなく叶うことを信じて、夢を見たい。少しでも近づきたい。とにかく街のエネルギが時代を作り街を変えていくのである。

今日一日を精一杯生きる。人はそう考える。目の前にあるもの、立ちほだかる壁を乗り越える。そのことが最大の試練なのだと思ひ努力する。そうした生き方は実は弱者の論理である。強者というのは明日からのことも考える。未来のより良い結果を想定して今の失敗や無駄を恐れない。今日は四打席三振でもペナントレースが終われば首位打者になることを狙う。どうにも人は弱者の論理の中で生きること慣れすぎている。成長するというこ

の仕事として胸が高鳴った。子供たちに本物のアートを見せたいという、最初のインスピレーションに基づいて、イギリスからストリートアートの著名な画家を招きライブペインティングをやったり、オーバード・ホールで富山を舞台にした映画『ほしのふるまち』の完成を祝した音楽イベントをやったり、世界的なタップダンサーを招聘したり、日本ボサノヴァ界の巨匠によるライブはワインの試飲会イベントと組み大人たちの優雅な時間を共有する催事になった。富山におけるダンスや舞踊のレベルの高さやクラシック音楽への深い傾倒なども考慮して、プログラムを作ってきた。すべてが大盛況ではなかったが、強者の論理でいけば、そうした試みが続けることでカルチャーの土壌はより芳醇になるといえるのではないか。

もうひとつ芸術の公演を目指すだけではな



オーバード・ホール

く、その裏方というべき人材を育成することも最重要課題である。大工がいて家が立つのだ。呉羽の芸術創造センターに象徴される解放された施設や日常の支援事業の充実の働きの根幹にある、市のルーティーンワークが未来の芸術の柱を支えていく。ポップなものに目を奪われやすいし、流行しているものに引つ張られるのが人情だが、結局はクラシックというか古典に遡る傾向は否めない。芸術は常に新しさを求められるが、本当に優れたものは古きものの中に全てが凝縮されていると思う。

人が興味を持つことを追いかけるだけでなく、時間をかけても興味を持つべきものを示し続ける、そんな街でありたいと思う。世界に誇るべき富山市の清廉で心温まる空気を損なうことなく、教養あふれる街になることを祈り全力を傾けたいと思う。そして市民全体

が芸術を愛し、その喜びを享受する。そのために失うこともいくつもあるかもしれない。前向きなビジョンのもとに消えていくものこそが実は一番大切なことではない。そうして獲得したものこそが真の答えだと信じたい。

糸山秋子さんの小説に富山を舞台にしたものがあつたが、そこでの舞台も美術館だった。そして市長が大好きで、いくらでも市長の話をしている男が出てきていた。体温が感じられる芸術の街、人と人が手を繋ぎ大切に故郷を愛する街、牽引していくリーダーたちを信じて笑顔で付いていく街、それが富山市でありたい。

指針
4

感

創

「ものづくり力」が発揮されるまち

川田 文人



川田 文人

かわたふみと

一般社団法人 北陸経済
研究所理事長

京都大学経済学部卒。米

国コーネル大学経営大学

院修士課程修了(MBA)。

(株)北陸銀行入行。京都

支店長、富山駅前支店長、

新宿支店長、執行役員本

店営業部長、執行役員融

資第一部長、常務執行役

員融資第一部長を歴任。

昔から私たちは富山は産業は発達しているが、文化果つるところと自虐的に言っていた。しかしそのような文化へのコンプレックスはそろそろ卒業してもいいのではないだろうか。演出家の浅利慶太氏は、「日本に文化果つるところは二つある。なんとといっても金沢と京都。富山は文化芽生えるところですよ」と言ったという。浅利のいう文化とは現代的な文化を創造する力のことで、金沢、京都は伝統文化の重みで新しいものを生み出す活力にかけているという意味らしい(「越中人のころ」吉崎四郎 富山新聞社1983年)。

芸術と産業は切り離せない関係にある。産業のないところに文化の発展はない。芸術は英語でArtという。語源はラテン語のars(アルス)、arsの語源はギリシャ語のtechné(テクネー)である。もちろんテクネーは、テクニク・技術の語源である。テクニク・技術は産業の基礎である。芸術、技術、産業は密接不可分の関係にあるといえる。

アリストテレスによればテクネーとは「真を認識するところのもの」のひとつであり、制作者が意図してそれまで存在しなかったものを

を作り出す方法を考察することである。作り出されるものは自然に作りだされるものでもなく、必然的に生成するものでもない。いわば自然の中から真であるものを人が作りだすための考察、認識である。

せるほど美が現れる、という。そうした最も平易な道に依存するものに自然は美を与える、そうした信念を柳は「他力道」と呼ぶ。民衆的工芸は他力的工芸である。

そういう意味で豊かな産業のあるところに必ず豊かな技術があり、文化がある、といえないだろうか。それは確かに高踏的な芸術のための芸術ではないかもしれない。しかし生活者のための用としての芸術があるはずである。民芸運動を創始した柳宗悦は、民衆の使用する道具あるいは雑器のうちに美を見出した。そういう民芸の特徴について、実用性、多量に作られること、廉価性、額に汗してつくられる勤勉な労働の結果であること、天然の材料の使用、分業、無銘性、地方性、伝統の重視、無想・無心性、単純性などをあげる。民芸の美は、阿弥陀の本願力によって凡夫が救われるように、自然な簡易な工程に身を任せれば任

柳は、民衆の手で民衆のために無心にたくさん作られる他力的工芸と少数の富貴の人のために、美術的意識から少量に作られる高価な自力的工芸があるという。越中にも自力的工芸はあった。たとえば越中瀬戸焼や杣田の螺鈿青貝細工が有名である。越中瀬戸焼は、前田利長が尾張の国瀬戸から陶工を呼び寄せてはじまったといわれ、藩の御用窯として栄えた。明治期以降一時衰えたが、現在は復活し作陶が続けられている。特にアップルの創業者スティーブ・ジョブズが愛したことで一躍有名になった。杣田細工とは、売薬で有名な二代藩主正甫が京都より呼び寄せた青貝師杣田清輔(そまだせいすけ)を祖とする螺鈿細工であ

る。青貝を菱形や方形に切り、金銀の切片と組み合わせて精巧な文様を作りだす螺鈿工芸である。代々藩の進物や藩主の身の回りの調度品に用いられてきた。特に後代の光正（1795～1856）が有名である。

そうした藩主の庇護を受けた少数富貴の人のための工芸は幕藩体制の崩壊によって明治以降衰退したため、富山には芸術的なものがないような印象ができてしまった。しかしものづくりとともに育まれた他力の工芸は土地とともに生きている。真宗王国富山には他力の文化が似合う土地風土なのである。

他力の工芸が支えた富山のものづくり、産業といえば売薬業であろう。言い伝えによれば天和3年（1683）二代藩主前田正甫が岡山の医師万代常関（まんだいじょうかん）を招聘し、「反魂丹」の製法を伝授されたという。その後元禄年間（1688～1704）頃、富山

力化により製造コストの低減が図られ、コスト競争力を生み出した。

二つ目は富山売薬の進物商法である。江戸時代後期他国売薬との差別化を図るために導入されたのが進物商法である。得意先に配るいわゆるおまけ商法である。最初に登場した進物は当時の浮世絵ブームに便乗した売薬版画である。江戸の浮世絵と同じような役者絵や名所絵など江戸と同じような題材の版画が富山で製作された。売薬版画は、松浦守美（1824～1896）や尾竹国一（1868～1931）などの町絵師を生み出した。売薬版画はおまけ商法の元祖ともいわれ、富山売薬の先見性を示すものである。

富山の手工芸として柳は、柳行李と八尾の和紙をあげているが、売薬業の発展は、様々な関連産業を生み出した。柳行李は但馬の豊岡から仕入れ、富山で仕上げをしている。薬の原

藩は八重崎屋源六（？～1749）に命じ、諸国行商を開始した。いち早く先用後利という配置販売方法を取り入れ、富山の売薬は大きく成長し、富山は薬の街「薬都」として発展していくことになる。

富山の売薬が発展した理由には、先用後利のビジネスモデルのほかにも二つの要因がある。一つは生産工程のイノベーション、すなわち丸薬の大量生産を可能にした道具の発明である。和算家中田高寛（1739～1802）は丸薬製造用具、下枘を発明した。中田高寛は関流和算家として著名であり、弟子には石黒信由（1760～1836）がいる。下枘は真鍮製の金型のようなもので、型に練りあがった薬を詰め、余分な薬をヘラで落とし、型を扇状に広げると一度に40個程度の荒い丸薬が出来る上がる。これによって均質な丸薬の大量生産への道を開くことになった。生産工程の省

材料を取り扱う薬種問屋、薬を包んだ包装用紙、帳簿用紙に使われた八尾の和紙、売薬商のソロバンや柳行李など売売り道具を取り扱う様々な商人、桐箱などのパッケージを作る指物師や曲物師、さらには薬袋のデザインなどに関わった書家などいろいろな職人がものづくりに関わった。曲げ物師の伝統はますますしの生産に活かされているし、富山市のデザイナーの多さは現在全国有数であるといわれている。

江戸時代末期の富山城下には4～5軒に1軒の割合で売薬商が住んでいたという。文化7年（1810）には富山城下の人口は3万4千人だったそうである。明治に入っても人口は増え続け、市政が施行された明治22年（1889）には5万8千人余りが住んでおり、全国で14番目に大きな都市であった。人口の増大は、産業の発展による富の集積の結果である。



富山の売薬業の発展は、富の集積をもたらしたが、富山の売薬業の精神は非常に禁欲的であった。たとえば代表的な薬種商の茶木屋中田清兵衛の家憲が知られている。六代目清兵衛が、享保二年（1717）に息子に書き残した遺訓が家憲となつて代々引き継がれてきた。中心となる考え方は、勤勉を旨とし、分相応に無理をしない、無駄なことには手を出さない、というものである。特に連歌、俳諧、茶の湯などの芸事に深入りしないように固く禁じている。そのせいか、今でも人知れず優れた美術品を収集している会社経営者の方が富山には多い。

県内のほかの地区、特に呉西地区では豪華な曳山文化が生み出され、豊かな民謡文化も生まれている。しかし富山城下では英国のピューリタニズムが芸術を抑圧したように、禁欲主義によって芸術のための自力の芸術は

今まさに北陸新幹線が開業し、首都圏と2時間で結ばれることとなった。これは対流人口の大幅な増加をもたらす。その結果多くの情報が交換され大きな刺激を受けることは間違いない。そうした外部の刺激は富山のものづくりをますます豊かにしていくだろう。そして産業の発展は富山らしいものづくりの文化を發展させ、逆にそうした文化の發展が富山のものづくりをさらに強くしていくだろう。

富山は金沢と違って自己主張するくらびやかな美よりも、地方性、無銘性、実用性、廉価性、他力性の美が、つまり富山が生んだ名建築家吉田鉄郎のいう「自抑的」な美が似合う街である。「自抑的」とは自己主張を抑え周囲との調和を重んじる思想である。それは「自我的なもの」「自分自身を目立たせること」の否定である。日本の手仕事は個性を否定するのでは

産まれなかったが、産業を支える他力の工芸はしっかり根を張ってきたといえるだろう。売薬産業を支えるいろいろな道具の製造、ろうそく、提灯、和紙など日用品の工芸は、いわゆる民衆工芸として發展してきたといえる。

富山の文芸の特徴は、このように売薬産業に支えられた実学である。歴代藩主は学問を奨励し、藩校の広徳館は安永2年（1773）、金沢の明倫館より約30年早く設立されている。さらに10代藩主前田利保（1800～1859）は薬業育成のために本草学に力を入れ、「本草通串」、「本草通串証図」を著した。これら芸術、学問の發展には、売薬や北前船を中心とした全国の情報の流入がある。越中の人々は江戸や上方の先進的情報を咀嚼しながら自らの文化の發達に取り込んできた歴史がある。

なく、「個性を型に入れて鍛錬することで、普遍にまで高める」のである。手仕事の思想の本質は時間をかけて、デジタル化によって生み出されない高度な技を蓄積し、質の高い独自の製品を作り上げることである。富山のものづくりの中には「他力的」で「自抑的」な手仕事の思想が流れている。そしてそれは私たちのものづくりのDNAとなつて生きている。だから富山には知られていないが、オンラインの技術を持ったユニークな企業が多い。富山の文化は「ものづくり力」が生み出す「創」の文化である。富山は文化果つるところではなく、ものづくりによって文化を創造する街である。

参考文献

- ◎ 柳宗悦選集 1～10
1955年 春秋社
- ◎ アリストテレス「ニコマス倫理学」岩波文庫
- ◎ 塩野米松「失われた手仕事の思想」2001年 草思社
- ◎ 牧野昇、会田雄次、大石慎三郎監修「江戸時代人づくり風土記16富山」
1955年 農山漁村文化協会
- ◎ 富山市郷土博物館「都市「富山」の四〇〇年」
2015年 富山市郷土博物館
- ◎ 松隈洋「残すべき建築」
2013年誠文堂新光社

夢

ワカモノ、ワタシの夢が叶うまち

本木 克英



私は松竹に所属する社員映画監督であるが、大半の時間はスタッフと仕事をしている。その九割は非正規雇用者であり、ワカモノと女性が多い。彼(彼女)らは映画作りに憧れ、「好きだ」という想いだけで肉体労働に献身するが、身分の保証はない。不動産探しに苦渋し、仕事が途切れればバイトでつなぎ、不安を抱えながら次の作品を探す。当然経済的に苦しいが、いつか一本立ちして生きた証を残したいと夢見ている。華やかさとはほど遠いため、昨今は男性スタッフが長続きせず、根気のある女性の占める割合が増えている。特殊な

職場ではあるが、若者は「面白そう」なものに集まり、大勢で一つのものを作るといふ、立ち向かうべき目標が見えていて、自身の貢献が他者に認められる一時があれば、働き続けていけるものだと思う。

世の現実はいかしく、若者と女性に厳しい。若者は低賃金にあえぎ、「女性が輝く社会の実現」とは裏腹に、男女雇用機会均等法が施行されてから30年近く経つが、女性の管理職は一向に増えず、企業の役員や政治家に占める女性の割合も大きく差をつけられて先進国最低

や人気ドラマが次々と作られ、業界内でも富山の話題が増え、存在感を放っている。「富山ってこんないいところだったんですね!」と、「釣りバカ」の撮影で初めて富山を訪れたスタッフや俳優たちは、意外性をもって口々に褒め称えてくれた。「立山連峰が圧巻」とか「魚や水、お米など、食材が抜群に美味しい」という従来からある評価や、「人と人が気持ちいい距離感を持って歩いている」、「街の掃除が行き届いていて、折り目正しい」など、暮らしに言及する者もいた。私自身、地味で排他的なイメージに反して、富山を出た「みゃーらくもん」の私を応援して下さる、お祭り好きで陽気な氣質が想定外にありがたく、その「やらんまいけ!」の精神が嬉しかった。いっぽう、富山の人は宣伝下手であるとも聞いた。

もう14年も前、2002年に公開された監督第二作、富山県を舞台にした映画「釣りバカ日誌13 ハマちゃん危機一髪!」の全国動員数の、なんと2割を富山県民が占める大ヒットを記録した。私は故郷の皆さんのおかげで、映画監督として生きて行く自信が持てた。以来、様々な富山の集まりに呼んで頂き、「夢を形に」と題して馴れない講演をし、富山市フィルムコミッションのアドバイザーまで拝命している。最近では、富山を主なロケ地とした映画

十年余りを経てその声は、「街中をかわいい電車が走っている」「何か先進的な取り組みを

本木 克英
もときかついで
映画監督、富山市政策参
与
1963年富山市生まれ
早稲田大学政経学部卒。
'87年松竹に入社し、「てな
もんや商社」で監督デ
ビュー。主な作品に「釣り
バカ日誌11〜13」「ゲゲ
の鬼太郎」犬と私の10の
約束」など。超高速!参
動交代」でブルーリボン
賞作品賞、日本アカデ
ミー賞優秀監督賞受賞。
最新作は2016年9月
公開の「超高速!参動交
交代リターンズ」

していますね」という、環境未来都市・環境モデル都市選定に呼応したものに加え、ノーベル賞受賞者や、日本を代表する映画・アニメの監督、有名芸能人を多く輩出したことから、「すごい人が続々と出ていますが、何があるんですか」と、富山の「人を育てる環境」への関心へと変わってきたと思う。富山市はいまや国連やロックフェラー財団からも国際的な評価を受け、毎年のように映画の舞台になり、発信力は充分に向上した。あとは、富山に住む人々が、その潜在力すなわち、全国トップクラスの「暮らしやすい環境」に磨きをかけて、さらなる充実を図り、「米騒動」の伝統を持つ働きものの富山女性に行動力を発揮してもらい、「たび(旅)の人」に門戸を開いていくことが求められる。

市民アンケートによれば、富山の人はその県民性を「勤勉」かつ「保守的」、そして「地縁血

ば、問題は解決する。富山出身の舞台俳優に陣頭指揮を取ってもらえばなお良い。財政豊かな劇団は少ないから、「稽古場貸します」から始めてもよいだろう。バイトが必要な時は、市が斡旋するのは言うまでもない。

「富山を知らない人に対しては『富山は面白いよ』というだけではなく、『富山は面白そうなことをいつもしている』と思ってもらうことが大事」。ふるさとCM大賞で審査をご一緒していたコラムニスト・故天野祐吉さんの言葉である。富山の宣伝力が上がったとはいえ、「面白そう」を作り続けるのは大変なことだ。つまりは企画の継続であり、女性の力が必要となる。商業映画の場合、鑑賞の意欲は女性が決め、観客の七割も女性が占めている。女性に関心が持たれないと、興行は失敗する。私も高校教諭をしていた母が、映画や演劇が好きだったおかげで、期待に反して映画監督を夢

縁を大切にすると客観的に見る一方、自分自身に対しては、「新しいものを取り入れ」、「進取の精神」があると評価している。こうした「新しいものの好き」のうえに、気概を有し自己実現を目指す人々は、必ず外の世界に出て、夢を形にしようとする。

まずは富山を出て夢を形にした人たちに、その仕事を富山を拠点にできないか、できない問題点は何かを問いかけてみよう。いい例がある。友人の元宝塚女優・内田もも香さんは、東日本大震災を機に拠点を富山に移し、朝日町の実家でカフェを営みながら芸能活動を続けている。地元メディアで順調に仕事をしながら、映像出演の声が掛かった時のみ東京に出かける。ただ、本業の舞台出演となると、稽古が一ヶ月は必要なので難しいという。例えば、全国公演ができる劇団の活動拠点が富山にあり、施設だけでなく、観客やスタッフとして市民が持続的に支えてくれるようになれば



富山市山田鍋谷

見てしまった。

「富山は仕事場。買い物と芸術鑑賞は金沢です」という若い富山女性たちの意見も「面白そう」づくりに反映させる必要がある。金沢に比べて足りないものを補うのではなく、富山

独自にあるものを発展させ、発信する。富山市を「山ガール」の聖地にするというのはどうだろう。峻険な北アルプスに憧れ、初めて登った山好きの友人女性曰く、「山小屋のホスピタリティは富山が日本一ね。トイレがきれいでご飯も美味しい。おまけにワインまで飲める」と。フランスワインを産出するぶどう畑の最高格「グランクリュ」に例えて室堂近辺を称賛した彼女であったが、下界に下りてその余韻が感じられるお店や施設が富山駅周辺に少ないことが「寂しい」とも言った。確かに富山市がスイスやカナダの山岳都市のような美観を備え、海の幸まで味わえるとなれば、唯一無二のまちになるなど想像した。

北陸新幹線開通という歴史的事業を経て、富山市民は浮つくことなく、謙虚に変化を受け入れている。出身者としては、富山らしく大らかでいいなと好感を持ちながら、人間関

そして、全国有数の共働きの誇る富山市民は、若者や女性が自己実現しようとする際、制度的な阻害要因があれば、率先して排除すべきである。敷居を下げて、働き口と安心できる住環境を提供し、職場でも彼(彼女)らの夢を共有する。映画の現場の場合、若いスタッフは夢とメシと風呂さえあれば、過酷な待遇でも耐えていける。現在東京では、ロケの撮影許可がほとんど下りず、撮影隊は片道二時間以上かけて都外に出かけ、「東京」を撮っている。私の夢は、富山に映画スタジオがあつて、ここに三ヶ月ほど滞在すれば一本の映画が出来上がるようになることである。天候が不安定な短所は、セットの中に逃げれば解消できる。

「気概を有する」人ばかりではなく、一度夢破れた人が、再出発を期す地が富山であつてもよい。いきなり拠点にするのではなく、まず長期滞在してもらい、富山の魅力を知って第

係においては様々な生き方にもっと寛容になるべきだと思う。今や核家族すら分かれて、一人親家庭や一人暮らし、気の合う仲間と人生を共にする生き方が増えた。富山のライフスタイルとは対極にあるものだが、異なった価値観にも身構えず、地縁の中に受け入れ、おせっかいしてほしい。富山市民が、家族の絆とは別にもう一人、夢を実現したいと思う人間を見つけ、「富山に来てみられ」と案内すれば、面白いことが起きそうだ。自身の富山時代を振り返ると、呉羽山近くの田園地帯にある広々とした家の中や外で、西町や総曲輪の映画館で見た数々の洋画を思い出し、あれこれ夢想したものである。気概はなかったが、映画への憧れは育てられた。富山弁で言う「あっかりする」「ホツとする」場所があつたことが今につながると思う。何かを創造するには、思いを巡らす時間と空間が必要である。

二の故郷にしてみらおう。自己実現したい人に「あっかりする場所」を提供し、「たびの人」を受け入れ、「面白そう」を作り続ける。最後に必要なのは、それを継続するマネジメント力であるが、国ならできずとも、先進的な富山市の規模なら「やらんまいけ」の精神をもってできるはずである。



資料編





ストリートミュージアム事業

まちなかの歩道や施設内にガラス作品を展示して、街全体をガラスのミュージアムにしてしまう、『ガラスの街とやま』ならではのプロジェクト。現在、中心市街地にある城址公園や市役所内をはじめ、様々な場所に作品を展示しています。



花Tramモデル事業

華やかで明るい空間を演出し、「花で潤うまち」を創出するため、指定の花屋で花束を購入し、市内電車等に乗車された方々の運賃を無料化を行っています。



富山市ストリートスポーツパーク

(NIXS(ニックス)スポーツアカデミー) ストリートスポーツ(スケートボード、インラインスケート、BMX、ダンス)やボルダリングを行うことのできる施設で、初心者から上級者まで幅広く楽しめます。



1. これまでの主な取り組み

スローライフを大切にすまち



岩瀬地区

岩瀬地区は、江戸期から明治期にかけて日本海を歩き来した北前船の寄港地として繁栄し、今なお歴史的建造物が数多く残る地区です。富山ライトレールの整備にあわせて、歴史的景観に配慮した道路整備や、無電柱化を行うとともに、伝統的の家屋や一般建築物の修景整備(補助)を行うことで、建築物と道路が調和した連続性のある景観が整備され、岩瀬を訪れる観光客が大幅に増加しています。



八尾地区

八尾地区では、哀愁に満ちた旋律にのって、揃いの浴衣から少し顔を覗かせた踊り手が町を流す全国的にも有名な「おわら風の盆」が開催され、毎年多くの観光客で賑わっています。また、歴史的なまち並みを保存するため、伝統的の家屋や一般建築物の修景整備(補助)、空き家活性化のための修繕・模様替え等を行っています。日本の道百選にも選ばれた諏訪町本通りでの「おわら風の盆」の佇まいは格別なものとなっています。



バナーフラッグ・ハンギングバスケット

富山市の中心市街地では、シンボルロードである城址大通り等に、通りを美しく彩るバナーフラッグ(垂れ幕)とハンギングバスケットを設置しています。バナーフラッグは架線柱や歩道照明柱に供架するもので、風になびき、様々な表情を見せるなど、魅力ある道路景観を演出しています。また、ハンギングバスケットは四季折々の花により彩られ、賑わいを演出しそれぞれが良好な都市景観を形成しています。

セントラムのラッピング

セントラムのラッピングは、四季折々の季節を感じるデザインや、まちなかのイベントを盛り上げるデザインなど、まちと人、車両が一体となってまちなかの魅力や賑わいを演出します。



富山市芸術文化ホール (オーバード・ホール)

客席可変機能により1650席のオペラ形式、1800席のコンサート形式、2200席のコンベンション形式を実現しています。



富山市民芸術創造センター

市民の方々に自発的な芸術文化の創作を行っていたため、旧紡績工場の広大な空間をリフォームした富山市民芸術創造センターは、音楽、演劇、日舞、洋舞、ダンス、美術などの創作活動をされている個人や、グループのための創作練習専用施設です。



富山能楽堂

富山能楽堂は、富山市富山南総合公園の一角にあり、能や狂言、謡などの公演や練習ができる拠点施設です。また、茶室が4室あり、茶道の愛好家やグループの茶会にも利用できます。



桐朋学園音楽部門 富山キャンパス

桐朋学園大学院大学、桐朋オーケストラ・アカデミーは、小規模ながら、恵まれた教育環境と施設設備とともに、学生個々の研究計画に十二分に応えられる教育課程(カリキュラム)と、世界に誇る優れた指導陣を擁しています。公開授業や公開レッスンのほか、富山市内の幼稚園、保育所、小中学校をはじめ、社会福祉施設やコミュニティセンターなどにも出向き、演奏会を開催するなど、地域市民との交流もさかんに行っています。



富山市ガラス美術館

「TOYAMAキラリ」に市立図書館本館、民間施設とともに入居しています。国内はもとより、チェコ、アメリカなどから400点を数えるガラス作家のコレクションの他、現代ガラスアートの巨匠デイル・チフリーのインスタレーション(空間芸術)の常設展示を行っています。



エコリンク

特殊樹脂パネルにオイルワックスを噴霧することで、氷上用のスケート靴を使用し滑る事が可能です。このエコリンク、通常のスケートリンクと違い、氷整備や冷却装置の電気代などのランニングコストがかからず、通常のスケート場の10%程度の費用で運営できることからエコリンクと呼ばれています。



富山市外国語専門学校

多様化する時代の要請にこたえ、実用性のある語学を習得させるとともに、異文化への理解を深め、広い視野を持った国際人として、産業および文化の振興と発展に貢献する有能な人材を育成することを理念としています。クラスを小規模編成とし、個別指導をきめ細かく行い、外国人専任講師6人を含む優れた教授陣が、生きた英語によるコミュニケーション重視の授業を行うことが特徴です。



富山市国際交流センター

富山市国際交流センターは、国際社会への市民の理解と市民による国際交流活動を推進する拠点です。(富山市の姉妹・友好都市)
 ・モジ・ダス・クルーゼス市(ブラジル連邦共和国)
 ・秦皇島市(中華人民共和国)
 ・ダーラム市(アメリカ合衆国)
 ・ウエリントンカウンシル(オーストラリア連邦)



富山ガラス工房

作家オリジナルの作品を制作・販売。平成16年10月に「創作工房」を増築。作家への設備レンタル、市民向け制作体験事業に本格的に着手平成24年9月に制作体験機能に特化した「第2工房」がオープンしました。



富山市民大学ガラス工芸コース

昭和60年4月、ガラス工芸コースを開設、初級・中級・選択の3コースでプロの講師の指導により、カット、サンドブラスト、バーナーワーク、パート・ド・ヴェールなどの技法を学べます。



民間企業による芸術文化施設等の開設

- ・演芸ホール「てるてる亭」
- ・樂翠亭美術館
- ・美術館「ギャルリ・ミレー」
- ・森記念秋水美術館



BEATRAM MUSIC FESTIVAL

市内電車環状線セントラムをシンボルとした「街なか野外音楽フェス」を開催。周辺商業主等とも連携し、音楽に触れる休日を創り出し、中心市街地の活性化やまちの魅力発信、音楽文化の振興等を図っています。



富山水辺の映像祭

「地球のタネ」をテーマに全国から募集した短編映像作品の中から、優秀な作品の授賞式を行い、受賞作品の上映を行うほか、トークショーなどのイベントを実施しています。

2. 富山市文化創造都市ビジョンに関するアンケート調査概要

調査実施要領

1 調査の目的

市民の文化活動に対する実態やニーズを把握することで、ビジョン策定の基礎資料とする。

2 調査設計と回収状況

(1) 調査の設計

- 調査対象者 / 富山市在住の満18歳以上の市民から2,000人
- 抽出方法 / 男女、年齢、地域に偏りがないよう無作為抽出
- 配布・回収方法 / 郵送による配布・回収
- 調査時期 / 平成27年10月

(2) 有効回答数と回収率

調査票発送数	2,000 (人)
有効回答数	821 (人)
回収率	41.1%



「AMAZING TOYAMA」

北陸新幹線の開業を機に交流人口拡大が見込まれる中で本市の魅力を発信していくことはもとより、市民一人ひとりがより一層、「わがまち」に対して愛着や誇りを抱く、いわゆる「シビックプライド」が重要であると考えています。シビックプライドの醸成に向けたキャッチフレーズを、「AMAZING TOYAMA」と定め、今後市民の皆さんと連携した事業を展開しています。

シティプロモーション、選ばれるまちづくり事業(定住・交流促進)

富山市の認知度とイメージを高めるための取り組みを総合的に実施するシティプロモーションに取り組んでおり、また、滞在型施設の整備、空き家情報バンクによる情報発信により、定住・交流促進を図っています。



富山ガラス造形研究所

平成3年4月開校の全国で唯一の公立ガラス専門教育機関です。
定員40名[造形科(2年制)32名、研究科(2年制)8名]
海外から客員教授を招聘(アメリカ、チェコ)



総曲輪ストリートダンスジャムズ

ひとつの新たな表現方法・コミュニケーション手段として、子どもからお年寄りまでの共通言語になりつつあるストリートダンス競技として繰り広げられる生のアツい表現をグラウンドプラザの大きな舞台上で富山の中心地からストリートカルチャーを発信しています。

主な調査結果

1 富山市民による県民性・自己評価

■縦軸に自分自身の気質(自己評価)、横軸に県民性(県民性評価)をとると以下の通りとなる。

■「勤勉性」「保守的」「地縁血縁を大切にする」「質素儉約」については、「県民性としてはあてはまる」とのポイントがプラスにあり、特に「勤勉性」「地縁血縁を大切にする」「保守的」は1.2ポイント前後と高い。

■また、「勤勉性」「地縁血縁を大切にする」「保守的」は県民性としてあてはまるとの回答よりもポイントは低いものの、自分自身にあてはまるとの回答のポイントも高い。県民・市民は昔ながらの気質であるが、自分自身は変わってきているとの見方もできる。

■一方で、「新しいものを積極的に取り入れる」については、自分自身については0.35ポイントとなっているが、県民性についてはマイナスとなっており、自分自身にはある程度当てはまるものの、県民性としては必ずしもあてはまらないと考えていることが伺える。

2 富山市の文化に関する重要度と満足度

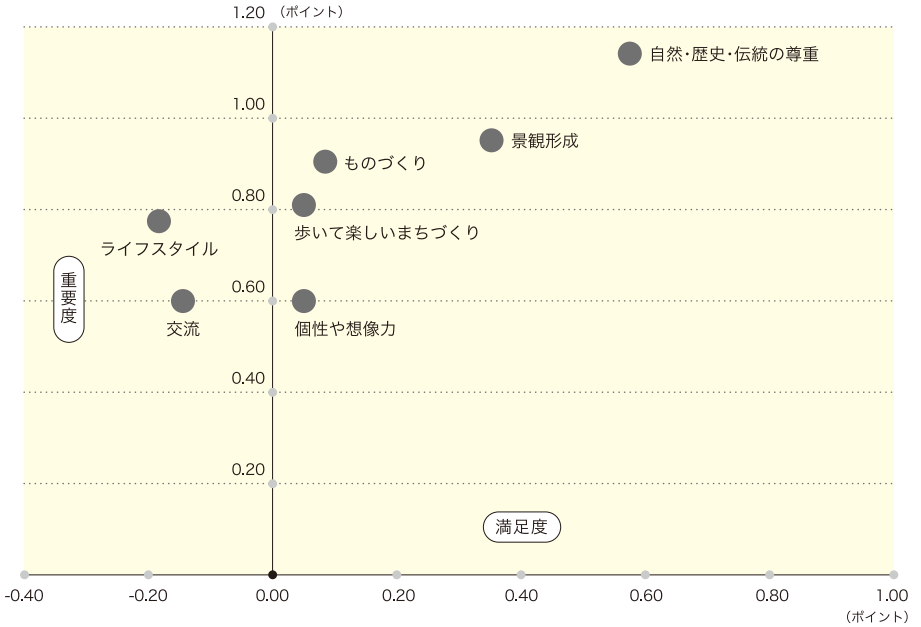
■縦軸に「重要度」、横軸に「満足度」をとると以下の通りとなる。

■「自然・歴史・伝統」は重要度が1.15ポイント、満足度が0.59ポイント「景観形成」については重要度が0.95ポイント、満足度が0.31ポイントと、重要度、満足度共に他より高い。

■「ものづくり」「歩いて楽しいまちづくり」「個性や想像力」の3つの項目については、重要度が約0.6〜約0.9ポイントとなっている一方、満足度は2ポイント前後にあり、満足と不満が拮抗している。

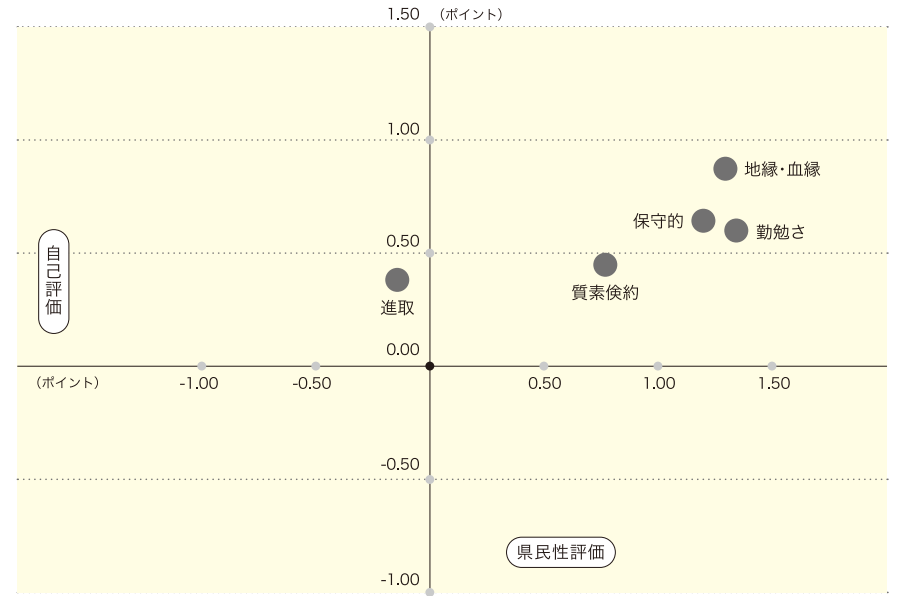
■一方、「交流」や「ライフスタイルの実現」に関しては、重要度が0.60ポイント、0.77ポイントとなっており他の項目に比べて低く、満足度に関するポイントについてもマイナスとなっているなど満足度も低い。

■富山市の文化に関する重要度と満足度



※ポイントの算出方法は前節と同じ

■文化風土の県民性評価・自己評価



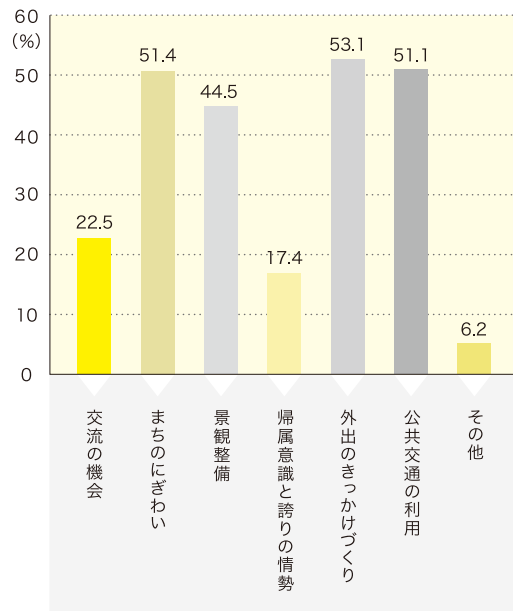
[ポイントの算出方法]

「県民性」や「自分自身の気質」については、回答の比率に対して、以下の係数を乗じてポイントを算出した。「あてはまる」構成比×2点+「どちらかといえばあてはまる」構成比×1点+「どちらでもない」構成比×0点+「どちらかといえばあてはまらない」構成比×-1点+「あてはまらない」構成比×-2点

3 必要な取り組み

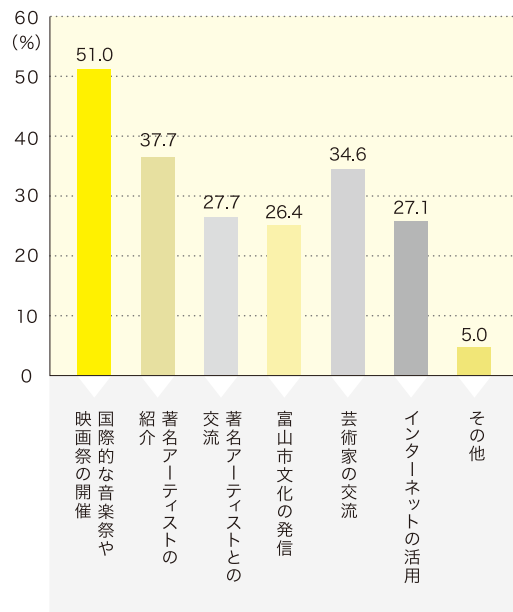
(1) 歩いて楽しいまちづくりのために必要な取り組み

「歩いて楽しいまち」にするための取り組みとして必要なことを見ると、「外出のきっかけづくり」「まちのにぎわい」「公共交通の利用」など地域の外へ向かうことに関する項目が、50%を超えている。



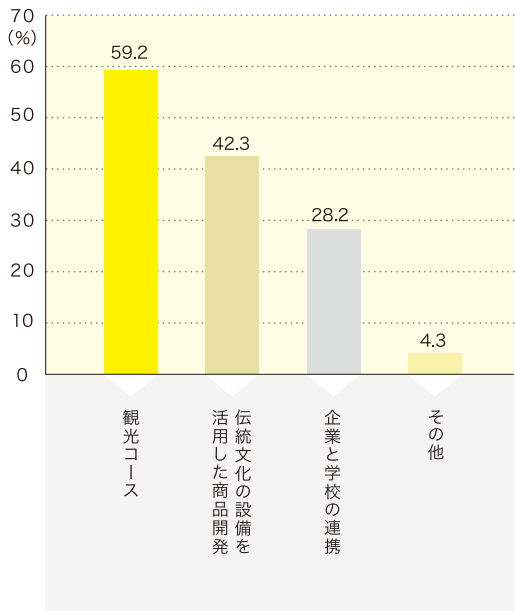
(2) 文化芸術交流を活発にするために必要な取り組み

○国内外との文化芸術交流を活発にするための取り組み「国際的な音楽祭や映画祭等の開催」が51.0%と最も多い。
○「著名アーティストの紹介」が37.7%、「芸術家の派遣・招聘」が34.6%とつづいており、質の高い文化芸術にふれる機会の充実へのニーズが見られる。
○一方で、「富山市文化の発信」や「インターネットの活用」など市内からの情報の発信に関する項目は下位となっている。



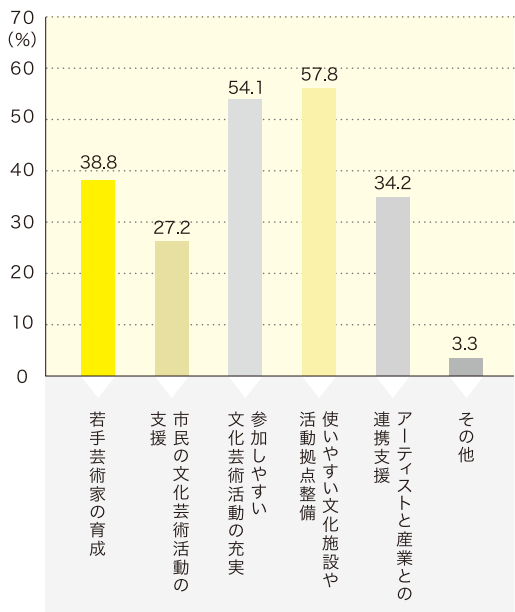
(3) 文化芸術と産業連携のために必要な取り組み

○文化や芸術と産業との連携に関する取り組みについては、「文化芸術の魅力を感じることができる観光コースの設定」として文化芸術と連携を図るとの回答が59.2%との回答が最も多く、「伝統文化技術や設備を活用した商品開発」が42.3%とそれにつづく。



(4) 若手アーティストが富山で活躍するために必要な取り組み

○若いアーティストが富山を拠点として活動するための取り組みを尋ねたところ、「使いやすい文化施設や活動拠点の整備」が57.8%、「参加しやすい文化芸術活動の充実」が54.1%と、活動の場に関する取り組みに対する回答が上位となった。





伝統から未来へ とやまを紡ぐ

富山市文化創造都市ビジョン

平成二十八年十一月発行

企画・編集 富山市

企画・編集協力 株式会社ラックス

デザイン・総合監修 富山市政策参与／

アートディレクター 長友啓典

アートディレクション アイアンオー株式会社 山口久美子

写真提供 北日本新聞社・富山スガキ(株)

富山市

印刷・製本 株式会社 山田写真製版所

発行者 富山市企画管理部文化国際課

〒九三〇一八五一〇

富山市新桜町七番二十八号

電話〇七六一四四三二〇四〇